

小淵沢町石上り遺跡

— 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1987

峡北土地改良事務所

小淵沢町教育委員会

小淵沢町石上り遺跡

— 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1 9 8 7

峡北土地改良事務所

小淵沢町教育委員会

序 文

小淵沢町は、古来より気候風土に恵まれ、多くの先人達の生活の舞台となった遺跡が残されています。さて、当町では農業の近代化をはかるために、昭和55年度より農業構造改善事業を実施しております。そして、本事業に伴って、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、本年度も昭和60年度に引き続き久保工区の発掘調査をおこないました。遺跡は発掘調査の結果、平安時代を主としたものであることが確認され、当時の生活の一端を明らかにする数多くの資料が出土しました。この度「石上り遺跡」の発掘成果を刊行するに当たり、本書が学術資料としてはもとより、文化財保護の普及のために広く町の方々にも利用されることを願ってやみません。

最後に、石上り遺跡の調査、報告書の刊行まで、御指導頂いた山梨県教育委員会文化課、峡北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区事務所の関係各位に深く感謝の意を表します。

昭和62年3月31日

小淵沢町教育委員会

教育長

宮 沢 辰 雄

例 言

1. 本報告書は、小淵沢町下久保地区県営圃場整備事業に伴う石上り遺跡の発掘調査報告である。
2. この調査は、峡北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、山梨県の補助金を受けて小淵沢町教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は、昭和61年6月10日から同年9月2日まで実施した。
4. 本書の執筆、編集は佐野勝廣が行った。
5. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで峡北土地改良事務所、県文化課の関係各位をはじめとする多くの方々から御指導、御助言を頂いた。記して、深く謝意を表します。
6. 本調査による、実測図は、小淵沢町教育委員会が保管し、出土遺物は小淵沢町立郷土資料館に保管、展示している。

7. 発掘調査組織

調査主体 小淵沢町教育委員会

調査事務局

教育長 宮 沢 辰 雄

課 長 進 藤 照 平

係 長 小 林 和 幸

調査担当 佐 野 勝 廣

8. 調査参加者

内田とくえ 小林恒子 坂井けさ子 坂井ふじ 進藤みやじ 三井ちか代

目 次

I 遺跡の位置と歴史的環境	1
II 調査に至るまでの経過	1
III 遺 構	4
VI 出土遺物	6
V ま と め	9

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺構配置図	3
第3図 第1号住居址平面図	11
第4図 第2号住居址平面図、カマド平面図	12
第5図 第3号住居址平面図、カマド平面図	13
第6図 第1号、2号掘立柱建物址平面図	14
第7図 土壙平面図	15
第8図 近世建物址平面図	16
第9図 近世墓址平面図	17
第10図 井戸址平面図	18
第11図 第1号住居址、第2号住居址出土遺物実測図	19
第12図 第2号住居址出土遺物実測図	20
第13図 第2号住居址出土遺物実測図	21
第14図 第3号住居址出土遺物実測図	22
第15図 第3号住居址出土遺物実測図	23
第16図 第3号住居址出土遺物実測図	24
第17図 第3号住居址出土遺物実測図	25
第18図 近世建物址出土遺物実測図	26
第19図 近世建物址出土遺物実測図	27
第20図 近世建物址出土遺物実測図	28
第21図 近世建物址出土遺物実測図	29
第22図 近世建物址出土遺物実測図	30
第23図 近世墓址出土遺物実測図	31

圖 版 目 次

- 圖版 1 遺跡近影
- 圖版 2 發掘風影
- 圖版 3 第 1 号住居址
- 圖版 4 第 1 号住居址
- 圖版 5 第 2 号住居址
- 圖版 6 第 2 号住居址
- 圖版 7 第 3 号住居址
- 圖版 8 第 3 号住居址
- 圖版 9 第 3 号住居址遺物出土狀態
- 圖版 10 第 1 号、2 号掘立柱建物址
- 圖版 11 土 壙
- 圖版 12 土 壙
- 圖版 13 土 壙
- 圖版 14 近世建物址
- 圖版 15 近世墓址
- 圖版 16 井戸址
- 圖版 17 第 1 号、2 号住居址出土遺物
- 圖版 18 第 2 号住居址出土遺物
- 圖版 19 第 3 号住居址出土遺物
- 圖版 20 第 3 号住居址出土遺物
- 圖版 21 第 3 号住、近世建物址出土遺物
- 圖版 22 近世建物址出土遺物

I 遺跡の位置と歴史的環境

小淵沢町は、山梨県でも最北に位置し、八ヶ岳南麓にある山岳町で北東を長坂町、南を白州町、西を長野県富士見町に接している。八ヶ岳南麓は、方射状に発達した谷とその間を走る尾根が規則的に並んでいる。石上り遺跡は、その尾根の一つの南端に位置し、小淵沢町下久保字石上りに所在する。小淵沢町内には、先土器時代に始まる数多くの遺跡が知られている。先土器時代の遺跡では、上笹尾の夏秋遺跡、松向の杉の木平遺跡がある。縄文時代の遺跡も多く、後期までの遺跡が知られている。中でも中期の遺跡が多く、昭和48年に中央高速道路建設に伴って発掘調査された中原遺跡がある。弥生時代には、中期の遺跡が多く発見されている。雪車、茶屋久保、田頭、源氏籠、長尾根、鼠尾、江戸山、向原、頭左沢南、篠八田など16ヶ所の遺跡が発見されている。古墳時代には、小淵沢町内では、松向の宝ヶ森遺跡から四世紀中頃の土器片が発見されているが、古墳が築造された跡は発見されていない。奈良時代の遺跡はまったく発見されていない。平安時代になると周知のごとく御牧が作られ、それに伴って集落が多つくられるようになる。

II 調査に至るまでの経過

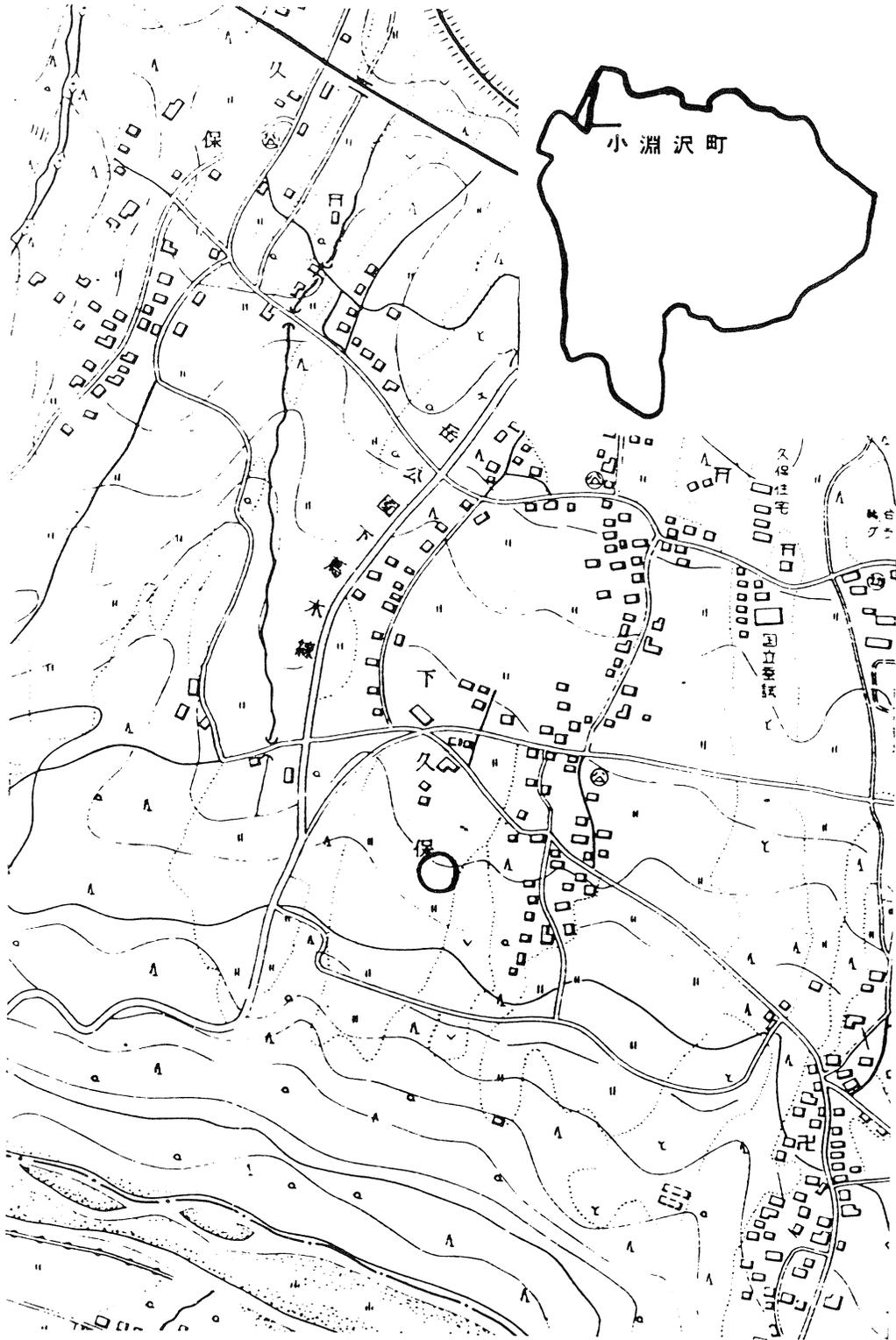
小淵沢町では、農業の近代化を図るため昭和55年度から県営圃場整備事業を実施しているが、それに伴って昭和57年から埋蔵文化財の発掘調査が行なわれている。昭和61年度は久保工区の石上りの約5ヘクタールが圃場整備事業の対象として予定された。このため小淵沢町教育委員会は、埋蔵文化財の有無を確認のため昭和60年12月に試掘調査をおこなった。その結果、平安時代の土器片を大量に検出したため、それをもとに県文化課、峡北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区事務所、小淵沢町教育委員会で協議を行い、昭和61年度県営圃場整備事業に先だって発掘調査を行なうことになった。発掘調査は、昭和61年6月10日より開始し、昭和61年9月2日迄行い、報告書作成を完了したのは、昭和62年3月であった。

発掘調査の方法

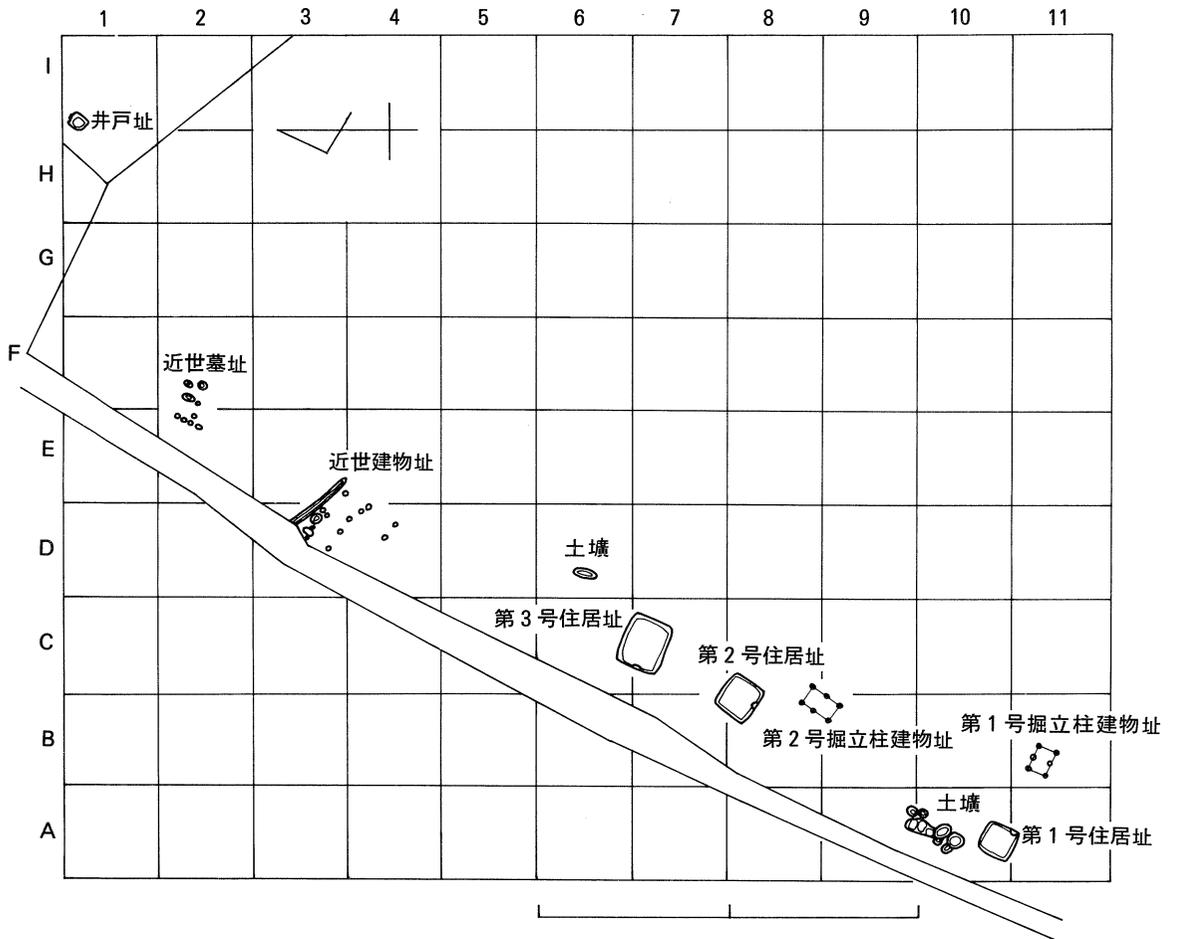
調査区全体の表土層を重機により排土し、その後、遺構確認面まで人力によって、掘りさげた。遺構の調査を行うために、磁北に基づいた10メートルグリットを設定し、西から東へA～I、北から南へ1～11と表示した。

3 層 序

- | | | |
|-----|---------|-----------------|
| 第1層 | 表土層、耕作土 | 色調は茶褐色 |
| 第2層 | 床土 | 色調は茶褐色（鉄分を多く含む） |
| 第3層 | 黒色土層 | 色調は黒褐色を呈する。 |
| 第4層 | ハードローム層 | 色調は黄褐色を呈する。 |



第1図 遺跡位置図 縮尺10000の1



第2図 遺構配置図 縮尺600の1

Ⅲ 遺 構

住 居 址

第 1 号住居址 (第 3 図)

本住居址は、調査区の南隅に位置し、プランは東西 3 m、南北 3.2m の隅丸方形を呈する。小型の住居址である。主軸方向は、N-120° -E である。壁高はローム層上面から 35 cm で壁は緩やかに立ち上がっている。壁溝は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦で踏み固められている。柱穴は 6 個確認され、直径 15 から 30 cm、深さ 10 から 25 cm である。カマドは、東壁の南隅に構築され、全長 110 cm、幅 100 cm、焚口幅 50 cm、煙道部は壁よりも外には出ていなかった。袖は平石の作り付けであるが、ローム、白色粘土で固められている。

第 2 号住居址 (第 4 図)

本住居址は、調査区の中央に位置し、第 1 号住居址より北に約 25m の地点にある。プランは東西 4 m、南北 4.2m の隅丸方形を呈する。主軸方向 N-128° -E である。壁高はローム層上面より 25 から 50 cm を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は幅から 25 cm、深さ 4 から 10 cm の浅い V 字形を呈し、カマドを除いて全周している。柱穴は 1 個確認された。直径 25 cm、深さ 20 cm であった。貯蔵的な役割をもったものと思われるピットが 2 個カマドの北側と南壁の西側よりに確認された。カマドは、南壁の東端に構築され、全長 180 cm、幅 190 cm、焚口部幅 80 cm で、煙道部は壁よりいくぶん外に出ている。袖は石による作り付けである。焚口部、燃焼部は楕円形に掘りくぼめられている。燃焼部の奥壁は、煙道部に向かって、垂直に立ち上がっている。なお幅 5 から 10 cm、高さ 20 cm の平石の支脚が直立し確認された。

第 3 号住居址 (第 5 図)

本住居址は調査区のほぼ中央に構築されている。プランは東西 4.5m、南北 4.4m の隅丸方形を呈する。主軸方向は N-55° -E である。壁高はローム層上面より 20 から 35 cm を測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は幅 6 から 10 cm、深さ 10 から 15 cm で U 字形を呈する。柱穴は 4 個確認された。これらは、径 5 から 40 cm、深さ 20 から 30 cm を測る。カマドの左のピットは径 40 から 50 cm、深さ 40 cm で貯蔵穴と思われる。カマドは、西壁の中央に構築され、全長 220 cm、幅 150 cm、焚口幅 130 cm で煙道部は壁より外に約 50 cm でている。袖は石を使用し、ローム、白色粘土で固められている。焚口部には 40 から 50 cm の平石が 3 個置かれていた。燃焼部奥壁は急な立ち上がりを見せる。燃焼部には幅 15 から 20 cm、高さ 35 cm の縦長の石が支脚として直立して置かれている。

掘立柱建物址

第 1 号掘立柱建物址 (第 6 図)

本建物址は、調査区の南隅に位置する。梁行 1 間、桁行 2 間の建物址である。主軸方向は、N-52° -E で、検出された柱穴は 7 個である。柱穴は径 20 から 40 cm、深さ 10 から 40 cm、なお

柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。

第2号掘立柱建物址（第6図）

本建物址は、調査区の中央に位置する。梁行1間、桁行2間で主軸方向はN-50°-Eである。柱穴は径25から40 cm、深さ10から30 cmを測る。出土遺物はない。

土 壙

第1号土壙（第7図）

プランは1.6 から 1.8mの不整形円形を呈し、深さ75 cmを測る。土壙内には30から40 cmの石がみられた。出土遺物はない。

第2号土壙（第7図）

プランは0.8 から 1 m、深さ30 cmの方形を呈する。底は平坦である。出土遺物はない。

第3号土壙（第7図）

プランは1.5 から 1.6m、深さ30 cmの楕円形を呈する。底は中央部が深くなっている。出土遺物はない。

第4号土壙（第7図）

プランは0.8 から 0.8m、深さ32 cmの楕円形を呈する。出土遺物はない。

第5号土壙（第7図）

プランは1.1 から 1.1m、深さ15 cmの不整形円形を呈する。出土遺物はない。

第6号土壙（第7図）

プランは1.5 から 1.7m、深さ10 cmの不整形円形を呈する。出土遺物はない。

第7号土壙（第7図）

プランは1.1 から 1.2m、深さ50 cmの方形を呈する。壁は垂直に立ち上がっている。出土遺物はない。

第8号土壙（第7図）

プランは0.7 から 0.9m、深さ25 cmの円形を呈する。底は中央でややくぼんでいる。出土遺物はない。

第9号土壙（第7図）

プランは1.1 から 1.2m、深さ1 mの円形を呈する。出土遺物はない。

第10号土壙（第7図）

プランは1.1 から 2 m、深さ30 cmの長楕円形を呈する。土壙内には20から 1 m位の集石がみられた。出土遺物はない。

近世建物址（第8図）

本建物址は、調査区の北側で確認された。12個の柱穴と1本の溝が不規則な配列で検出された。全体的に遺物が多く、生活遺構の存在が考えられる。柱穴は大きいもので20 cm、小さいもので10 cm、深さ15 cm前後が多い。柱穴の内部は比較的軟弱で黒色土が堆積している。溝は幅50

から80 cm、深さ10から30 cmである。出土遺物は陶磁器が多く、溝から砥石が5個出土した。

近世墓址

第1号墓（第9図）

プランは30から35 cm、深さ15 cmの不整形円形を呈する。底は平坦である。内部から骨片が出土している。

第2号墓（第9図）

プランは30から40 cm、深さ20 cmの楕円形を呈する。底は南から北に向かって低くなる。出土遺物はない。

第3号墓（第9図）

プランは25から30 cm、深さ15 cmの円形を呈する。出土遺物はみられない。

第4号墓（第9図）

プランは35から40 cm、深さ20 cmの楕円形を呈する。出土遺物はみられない。

第5号墓（第9図）

プランは50から60 cm、深さ20 cmの不整形円形を呈する。出土遺物は寛永通宝が4枚とクルミ1個が出土した。

第6号墓（第9図）

プランは25から40 cm、深さ15 cmの円形を呈する。出土遺物は寛永通宝2枚出土した。

第7号墓（第9図）

プランは80から95 cm、深さ50 cmの方形を呈する。出土遺物はない。

第8号墓（第9図）

プランは40から50 cm、深さ35 cmの不整形円形を呈する。7号墓に切られている。出土遺物はない。

第9号墓（第9図）

プランは70から85 cm、深さ50 cmの円形を呈する。出土遺物は陶磁器片1点である。

第10号墓（第9図）

プランは70から80 cm、深さ45 cmの円形を呈する。出土遺物はない。

井戸状遺構（第10図）

井戸状遺構は調査区の北隅に検出された。径1.8m、深1.35mである。井戸枠は自然石による石組みで4から5段あるが、大きさは均一ではなく乱積みである。井戸内の埋土は黒色土を主体とした層からなり、人為的に埋められたものと考えられる。

IV 出土遺物

住居址出土遺物（第11図）

第1号住居址出土遺物（第11図）

1は口径10 cm、器高 3.2 cm、底径 4.4 cmの坏である。底部より内傾し、口縁部に至る。内面黒色処理がなされている。2は口径12 cm、器高 2.2 cm、底径 6 cmの皿である。口縁部上半で外反する。3は口径18 cm、器高12 cm、底径 6 cmの小型甕である。色調は黒褐色を呈する。

第2号住居址出土遺物（第12・13図）

4は口径13.4 cm、器高 5 cm、底径 6 cmの坏である。底部より急に内傾し立ち上がり、口縁部は外反する。内面黒色処理されている。5は口径13 cm、器高 5 cm、底径 6 cmの坏である。内面黒色処理されている。6は口径12 cm、器高 4 cm、底径 6 cmの坏である。底部より緩やかに立ち上がる。内面黒色処理されている。7は口径12 cm、器高 4 cm、底径 6 cmの坏である。色調は赤褐色を呈する。底部は回転糸切り。8は推定口径12 cmの内面黒色処理の坏である。9は外面に「公」の墨書がみられる。10はロクロ整形された小型の甕である。11は推定口径30 cmの甕である。口縁部がやや外反する。12は推定口径30 cmの甕である。器形がおおむね真つすぐ立ち上がる。13は推定口径28 cmの甕である。14は推定口径30 cmの甕である。15は推定口径30 cmの甕である。胴部が張っている。16は推定口径40 cmの甕である。口縁部で大きく外反する。17は推定口径28 cmの甕である。ロクロ整形された信濃系の甕である。18は推定口径20 cmでロクロ整形されている小型の甕である。19は鉄製刀子で全長14 cm、刀身部 7.2 cm、柄部 6.8 cm、を測る。柄部には木質が多く残っている。20は鉄製角釘である。全長 4 cmで頭部をほぼ直角に折り曲げている。21は柳葉式の鉄鏃で全身 8 cm、刀身部 2.2 cmを測る。

第3号住居址出土遺物（第14・15・16・17図）

1は口径12.4 cm、器高 5 cm、底径 5 cm の坏である。口唇部で若干の玉縁状になる。外面に「万千」の墨書がみられる。内面墨色処理されている。2は口径12 cm、器高 4.4 cm、底径 4.4 cmの坏である。3は口径16 cm、器高 6 cm、底径 6 cmの坏である。内面黒色処理されている。4は底径 5 cmで回転糸切りがみられ、内面黒色処理されている。5は底径 5 cmで回転糸切り痕が残っている。内面黒色処理されている。6は底径 5 cmで回転糸切り痕が残っている。7は口径 6 cm、内面黒色処理されている。8は推定口径16 cmで外面に「千」の刻書がみられる。9は推定口径14.8 cmで外面に「万千」の墨書がみられる。10は推定口径14 cmで外面に「万」の墨書がみられる。11は推定口径14 cm、外面に「万」の墨書がみられる。内面黒色処理されている。12は口径12.6 cm、器高 3.4 cm、底径 6 cmの須恵器坏である。色調は青灰色を呈する。底部は回転糸切り痕が残る。13は推定口径12 cmの須恵器坏である。14は底径 7.6 cmの内面黒色処理されている高台付坏である。15は口径12 cm、器高 2.2 cm、底径 6 cmの高台付皿である。外面に「宗」の墨書がみられる。16は口径12 cm、器高 4 cm、底径 6.4 cmの灰釉陶器である。17は口径10 cm、器高 2.2 cmの灰釉陶器の蓋である。18は口径12 cm、器高 2.8 cm、底径 5.6 cmの高台付皿である。内面黒色処理されている。19は推定口径30 cmの甕である。口縁部がくの字を呈する。20は推定口径30 cmの甕である。胴部より垂直に立ち上がり、口縁部で強く、くの字を呈する。21は推定

口径30 cmの甕である。口縁部で強く外反する。22は推定口径32 cmの甕である。23は底径 8.8 cmのロクロ整形の甕である。色調は赤褐色を呈する。

近世建物址出土遺物（第18図）

民家跡と思われる遺構で用いられた日常雑器であり、全て破損品である。

茶碗（第18図）

1は口径8 cm、器高 5.5 cm、底径4 cmで薄青色の草花文を描いている。2は口径10 cm、器高6 cm、底径 4.5 cmで松を薄青色で描いている。3は推定口径12 cmで紫味青色の梅文を描いている。内面の口縁部下部に雷文を描く。4は推定口径10 cmの薄青色の矢羽文を描いている。5は推定口径6 cmでコバルトのややくすんだ青色を呈いし、山形文を描く。6は底径 2.5 cm、薄青色で草花文を描き、高台部に歯文を描いている。7・8は青味白色の釉がかかる。9は筒形の茶碗であり濃い青色で菊花文を描いている。10は推定口径8 cmでやや黒味のある草花文を描く。

鉢

11は推定口径14 cmで濃い青色で鶴と雲を描いている。

猪口

12は口径6 cm、器高 6.5 cm、底径4 cmの猪口であり、青色の格子文を描いている。

皿（第19図13・14・15・19）

13・14・15・19である。13・15は濃い青色の草花文を描いている。14は薄緑の釉がかかる。19は口径 8.5 cm、器高 2.8 cm、底径 3.5 cmで紺色の草花文が描かれている。

摺鉢（第19図16・17）

16・17である。16は茶褐色を呈している。17は明茶褐色を呈している。

壺（第19図18・23）

18・23である。18は茶褐色の釉がかかっている。23は近世墓址より出土し、推定口径15 cmを測る。

灯明皿（第21図20）

20である。口径10 cm、器高 2 cm、底径4 cm、灰白色の釉がかかっている。

内耳土器（第21図24・25・26・27）

24・25・26・27である。24は口唇部が平坦で、内面は若干凹凸がみられる。外面黒色、内面灰褐色を呈する。25は口縁部が内傾し立ち上がる。内面はヨコナデを施している。26はほぼ直線的に立ち上がり、外面に輪積み痕が残る。27は口唇部で内反し丸味を呈する。

砥石（第22図1・2・3・4）

砥石は全て凝灰岩製である。1は全面がよく使用され、けずりぶし状の形態なす。3・4は長方体をなし、全面が滑らかによく使用されている。

その他（第21図21・22）

21・22は緑色の釉がかかる高台部片である。

近世墓址出土遺物（第23図1・2・3・4）

寛永通宝は近世墓より出土したもので、4枚共に錆化が進んでいる。

遺構外出土遺物（第23図1・2・3・4・5・6）

本銭貨は中国銭6枚で、6枚重って出土したことから、墓に伴う「六道銭」ではないかと思われたが、周囲には、骨も墓壙も認められなかった。

開元通宝（唐 713年から741年 楷書体）

嘉祐通宝（北宋 1056年から1063年 楷書体）

熙寧元宝（北宋 1068年から1077年 楷書体）

熙寧元宝（北宋 1068年から1077年 楷書体）

元豊通宝（北宋 1078年から1085年 草書体）

V ま と め

住居址について

本遺跡で検出された竪穴住居址は、3軒検出され、全て平安時代のものである。住居址のプランは3軒の住居址共に隅丸方形である。規模は3から4.5mであったが第1号住居址のみ3から3.2mと他の2軒に比べて小さかった。柱穴は3軒共に検出されたがその配置はバラエティーに富んでいた。貯蔵穴的なピットは第2号住居址のカマドの右側で検出されたが掘り込みは浅かった。カマドはそれぞれの住居址の東西南壁に構築されており、カマドの設置方位における統一性は見られない。カマドの構築材は石と白色粘土、ロームを使用している。掘り方の平面形態は規格性はみられないが、燃焼部は屋内にもち楕円形のものである。煙道部は若干壁外に延びている。規模としては、長さ1.1から2.2m、幅は0.8から1.5mである。燃焼部には細長い石が支脚として置かれていた。床はロームを使用した貼り床である。壁溝は第1号住居址以外の住居址でカマド部分を除いて検出された。

掘立柱建物址について

本遺跡で検出された掘立柱建物址は2棟である。2棟共に梁行1間、桁行2間の建物址で、柱穴は比較的小さく、底は平坦であった。本建物址の用途については、住居址とした場合には食事のための煮焚きしたと思われるカマドがなく、出土遺物もないことから倉庫址と考えられる。

土 壌

土壌は不整円形から円形で断面は皿状を呈し、全般的に浅く、伴出遺物は認められない。用途や性格は他の遺跡の例等から墓と考えられるが明確ではない。

近世建物址

本遺跡で検出された近世建物址は出土した陶磁器等の遺物から、江戸末期の民家跡であると

思われる。

近世墓址

本遺跡で検出された近世墓は10基で、それらのプランは概して、円形のものと同方形のものがある。骨の残り方は悪く大部分が骨粉化していた。副葬品は寛永通宝とクルミそれに陶磁器片1点であり意外に貧弱であった。寛永通宝はいわゆる六道銭で、錆化のため付着した状態で出土した。クルミは通称サワグルミと呼ばれているものである。クルミを副葬する風習は現代でも山梨県の一部の地域でおこなわれている。その意味するところは、「また来る身」といって再生を誓ったものであった。

出土遺物について

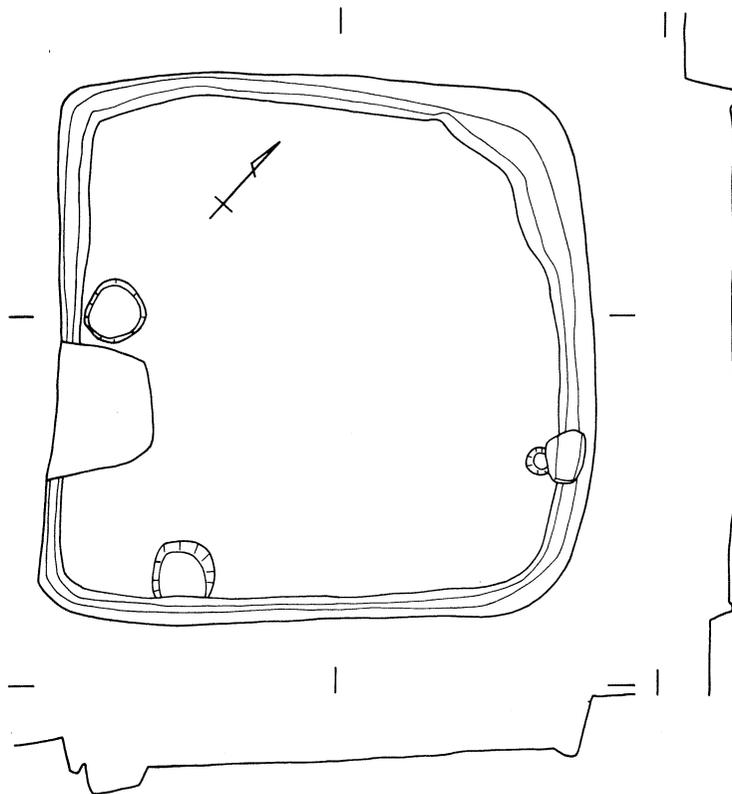
灰釉陶器は出土数が極めて少ない。第3号住居址出土の灰釉陶器は椀と蓋であり、椀は底部よりゆるやかに立ち上がり口縁部がやや外反している。底部は人の字形に外に開く、底部は回転糸切り痕を回転ヘラケズリで消している。釉は口縁部を中心に内外面共に施されている。高台は貼り付である。本品は明らかに黒笹90窯址の製品である。

須恵器杯は、第3住居址より出土したもので、底部よりゆるやかに立ち上がり、口唇部直下で外反する。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土中に白色粒子を含み焼成は良好である。山梨県内特に北巨摩郡内での本品と類似する須恵器杯はいくつかの遺跡で確認されているが、この須恵器杯を生産した窯址はまだ見つかっていない。本品と類似品が長野県の窯址から出土しているようで、もしからしたら、長野県からの搬入品かもしれない。

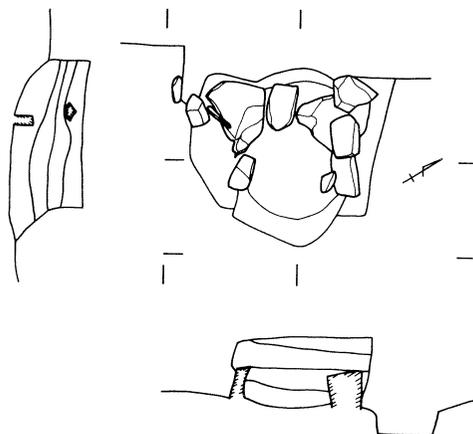
土師器杯は全て内面黒色処理されているもので、完全に長野県からの搬入品と考えられる。年代観は、9世紀後半から10世紀のはじめに位置づけられる。



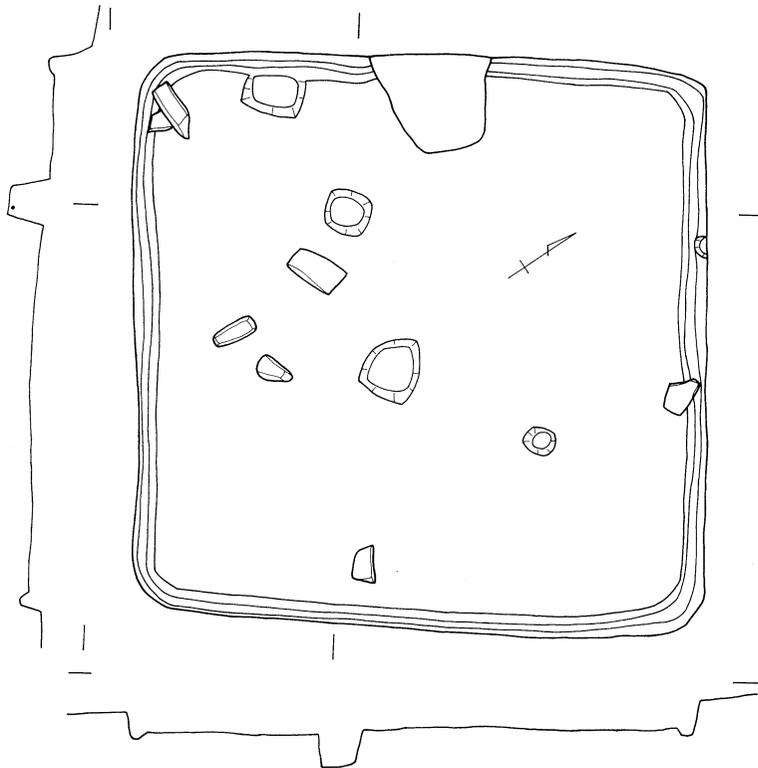
第3図 第1号住居址平面図 縮尺1/40



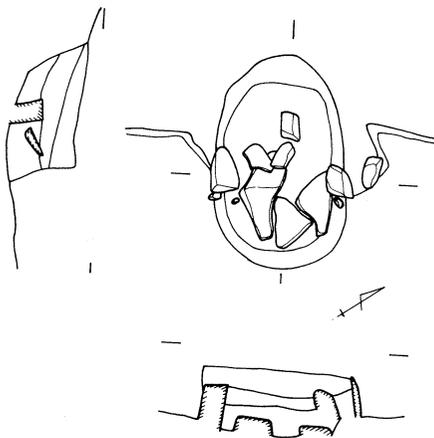
第4図 第2号住居址平面図 縮尺1/60



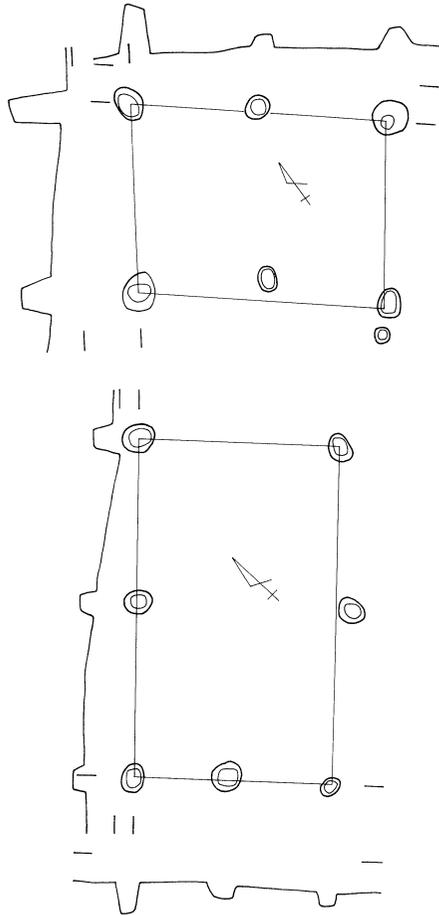
第4図 第2号住居址カマド平面図 縮尺1/80



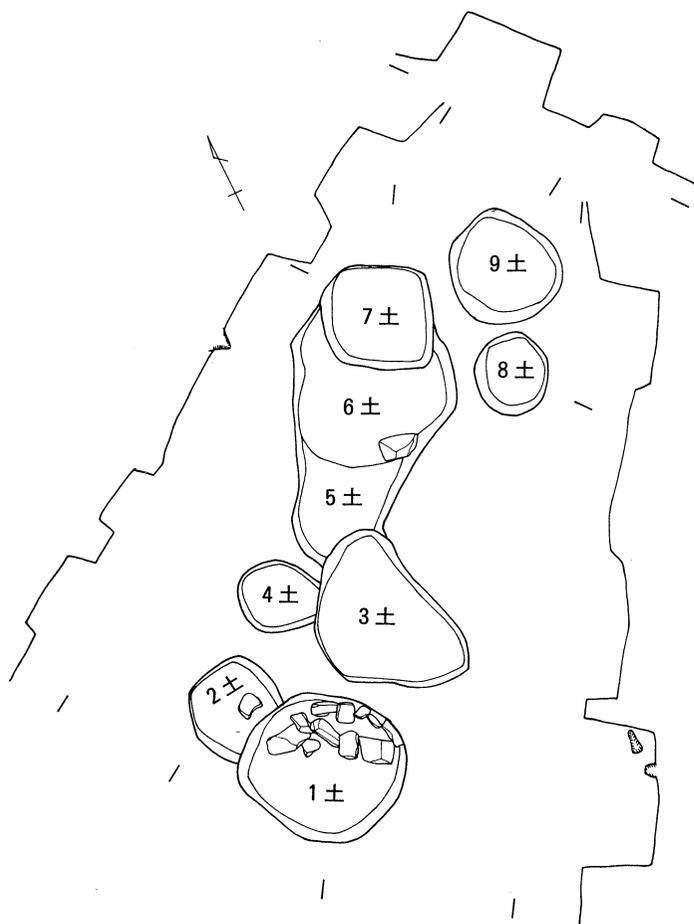
第5図 第3号住居址平面図 縮尺1/60



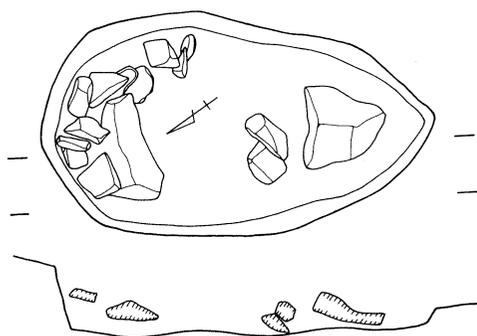
第5図 第3号住居址カマド平面図 縮尺1/80



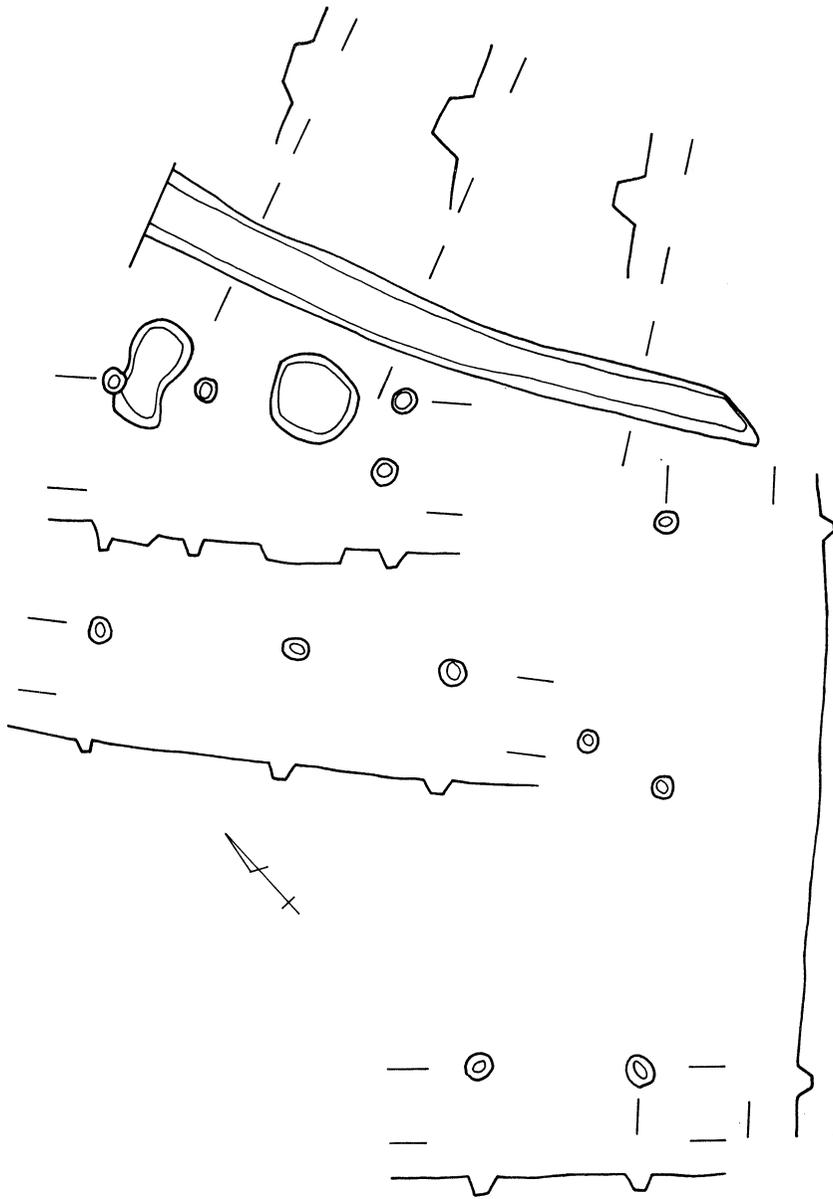
第6图 第1号掘立柱建物址、第2号掘立柱建物址 縮尺1/80



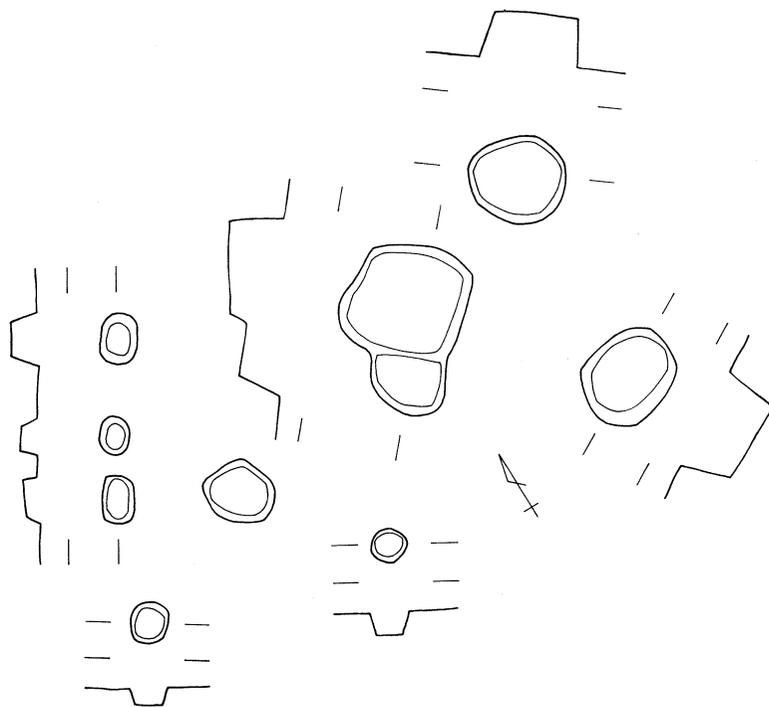
第7図 土壙平面図 縮尺1/80



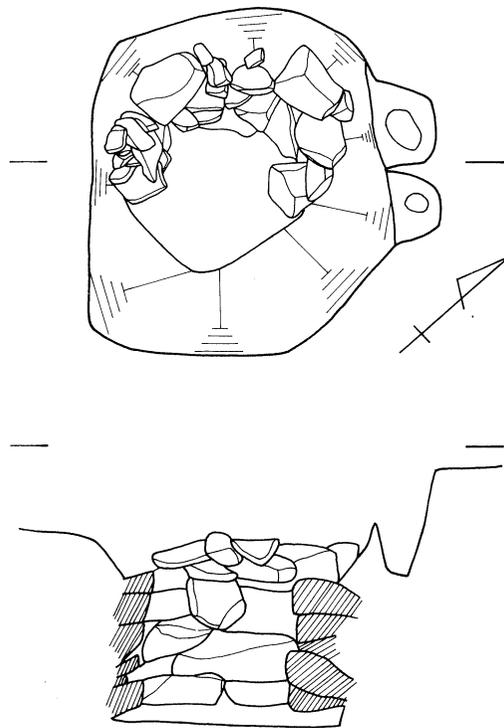
第7図 第10号土壙平面図 縮尺1/80



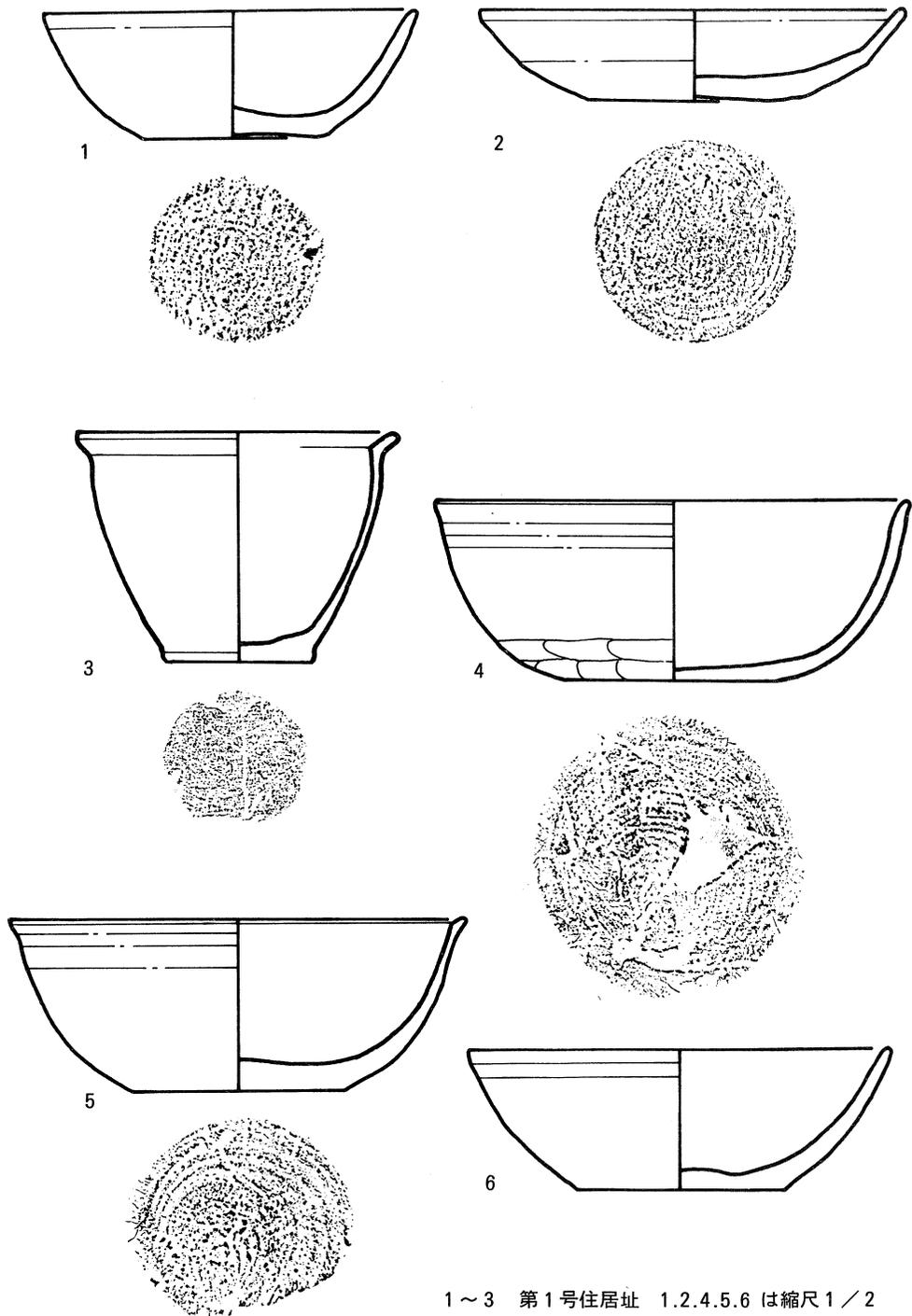
第8図 近世建物址平面図 縮尺1/80



第9図 近世墓址 縮尺1/60

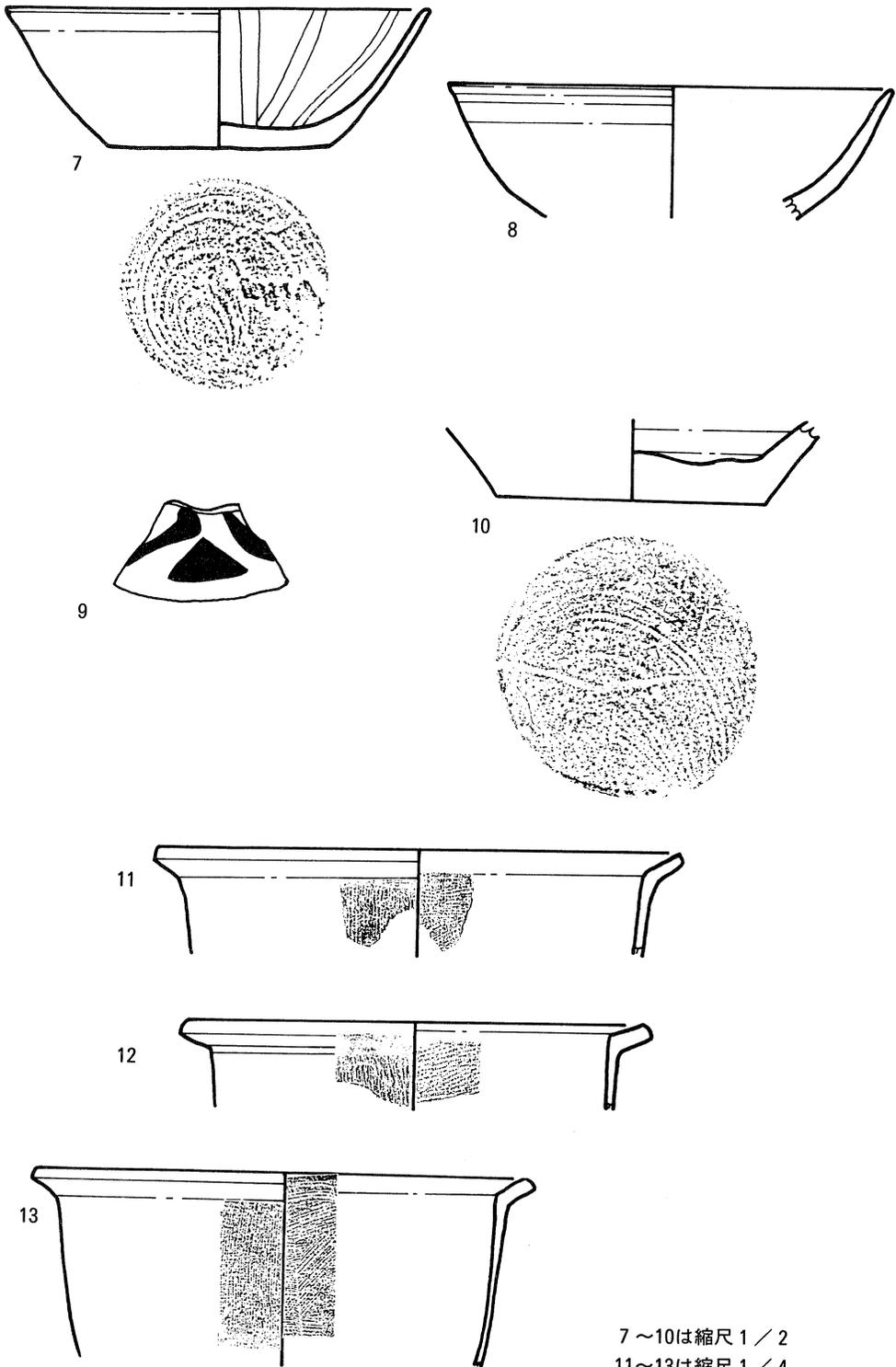


第10図 井戸址 縮尺1/80

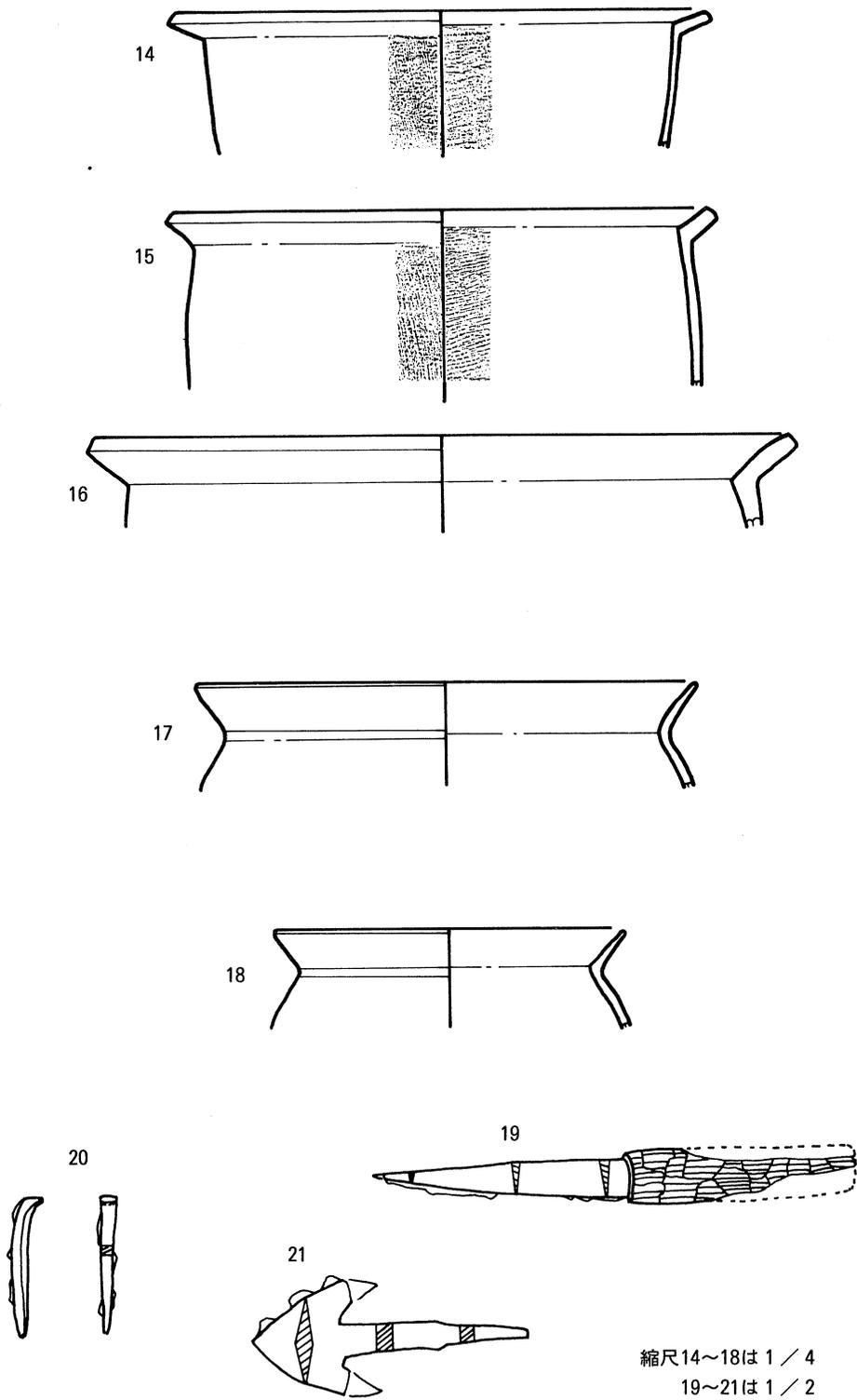


1~3 第1号住居址 1.2.4.5.6 は縮尺1/2
 4~6 第2号住居址 3は縮尺1/4

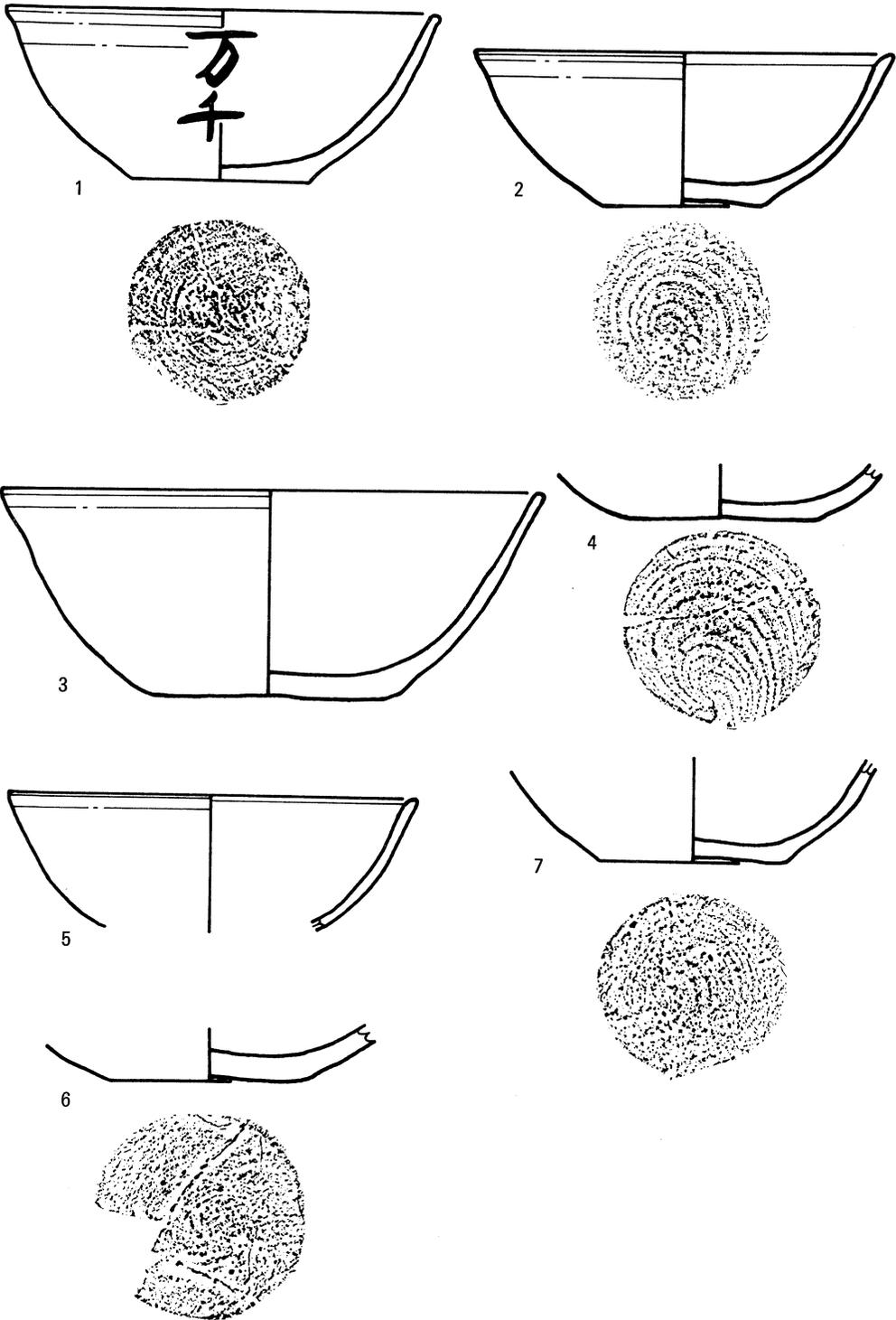
第11図 第1号住居址、第2号住居址出土遺物



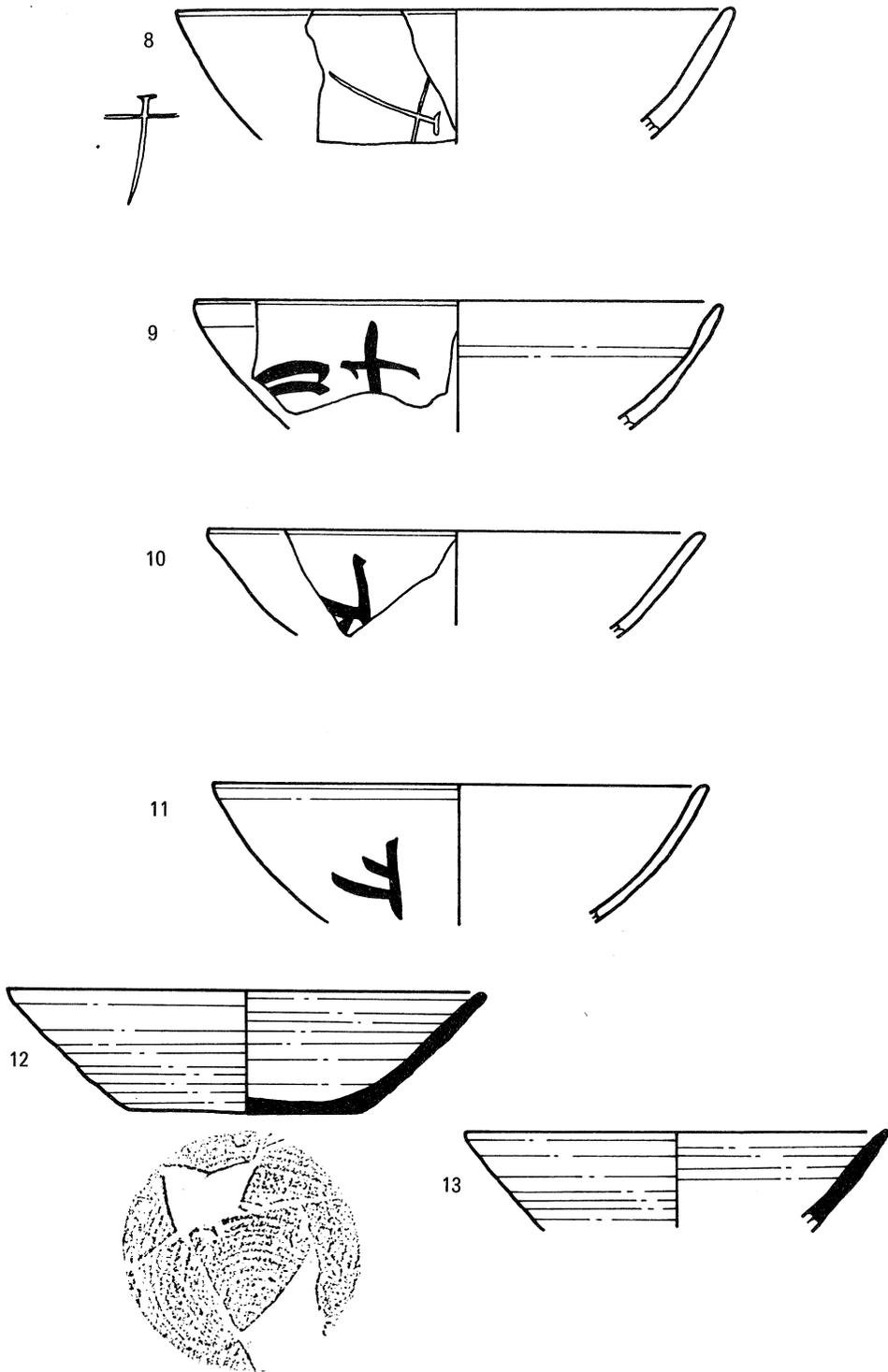
第12図 第2号住居址出土遺物



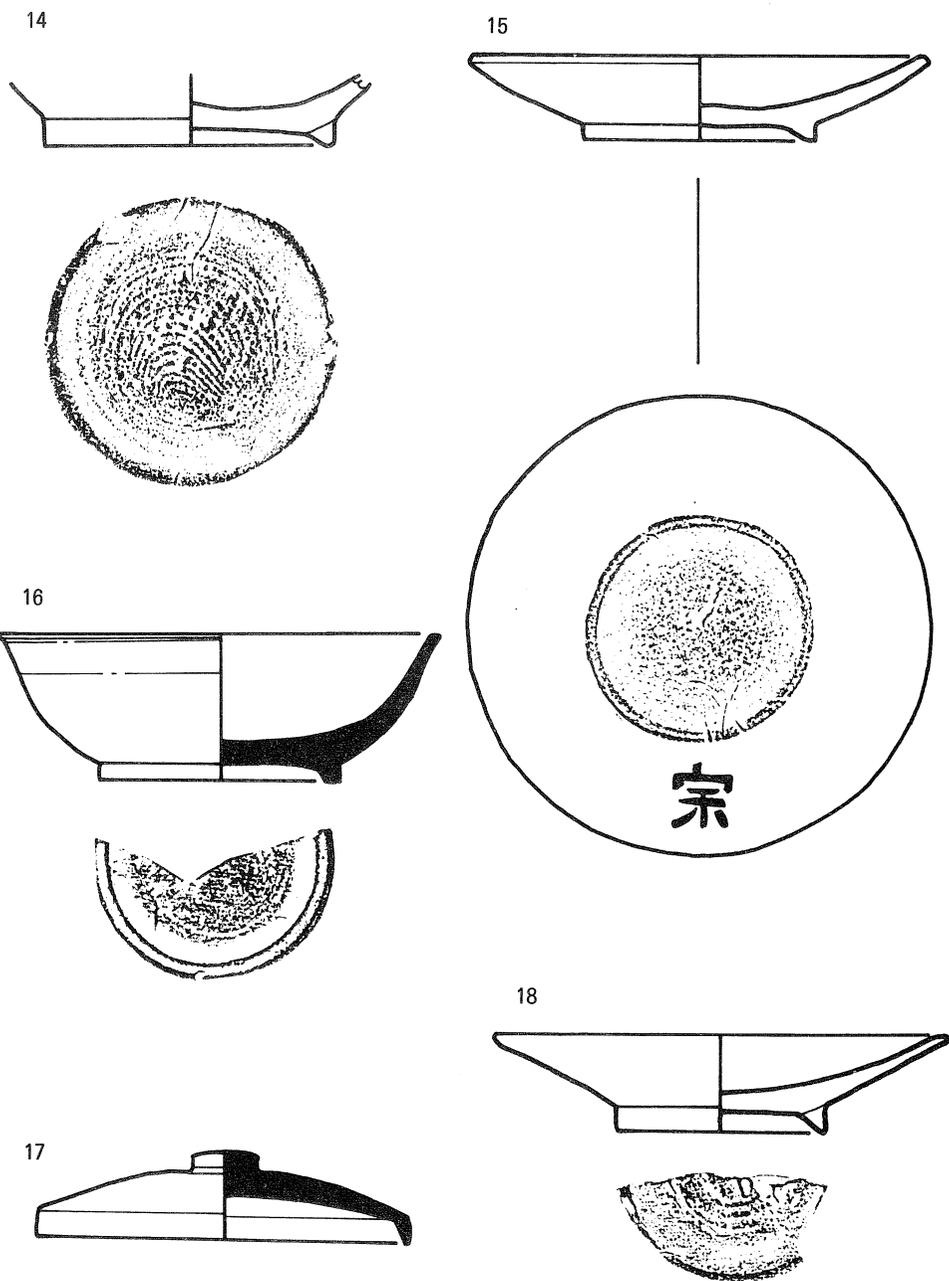
第13図 第2号住居址出土遺物



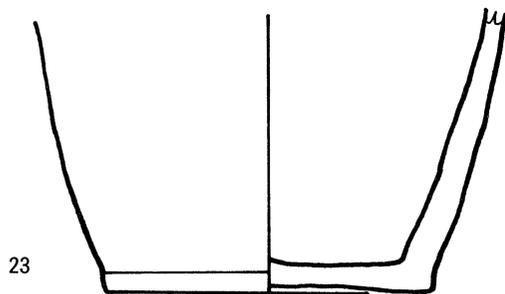
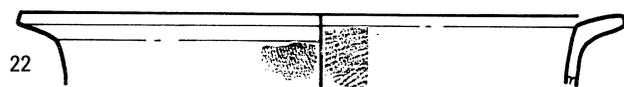
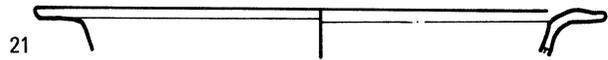
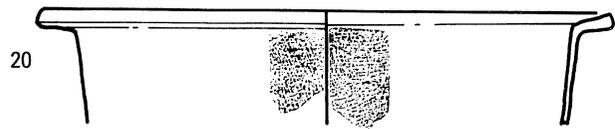
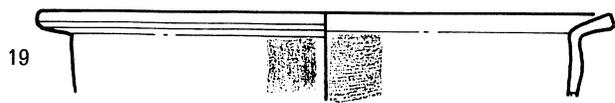
第14図 第3号住居址出土遺物 縮尺1/2



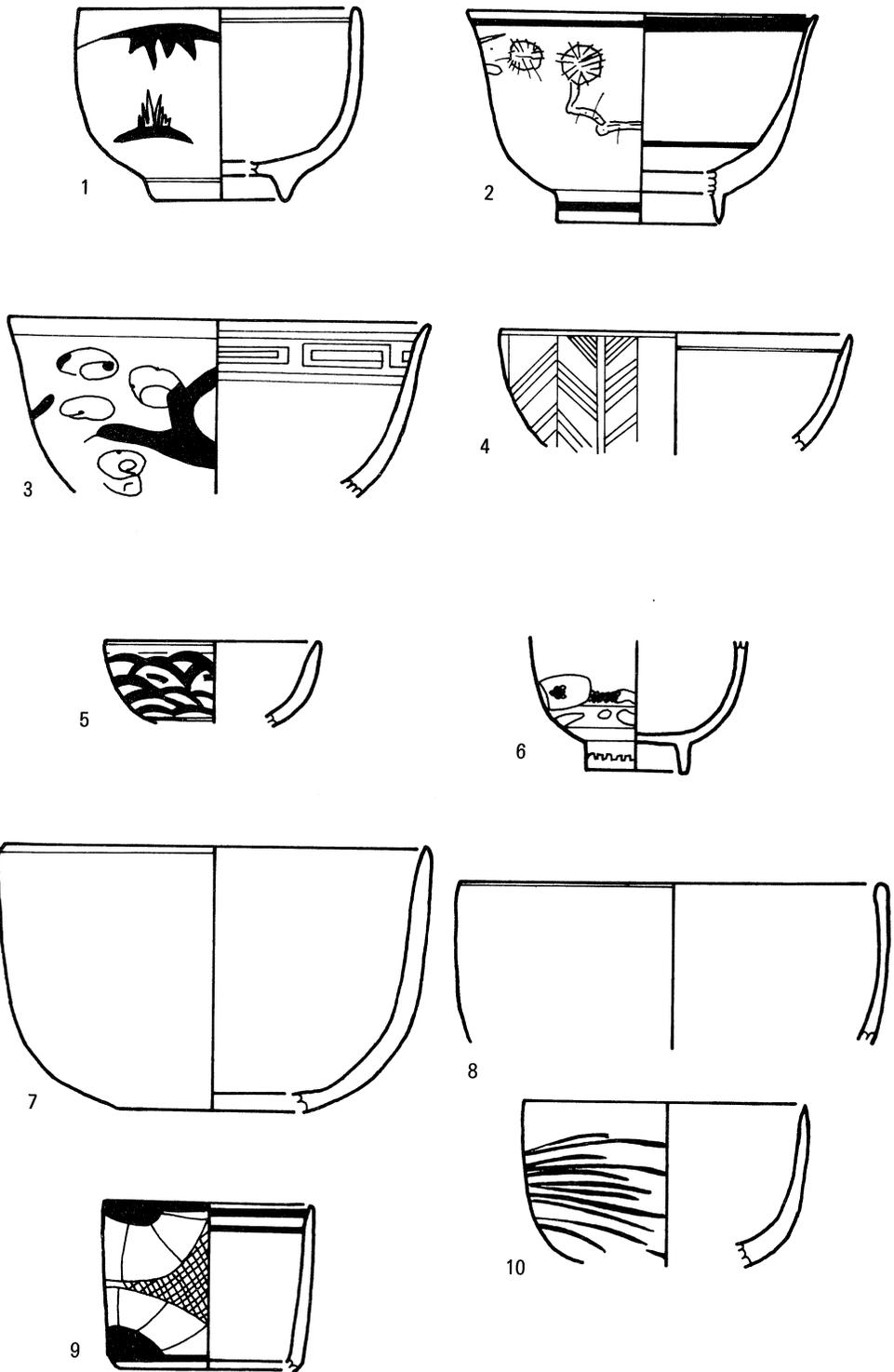
第15図 第3号住居址出土遺物 縮尺1/2



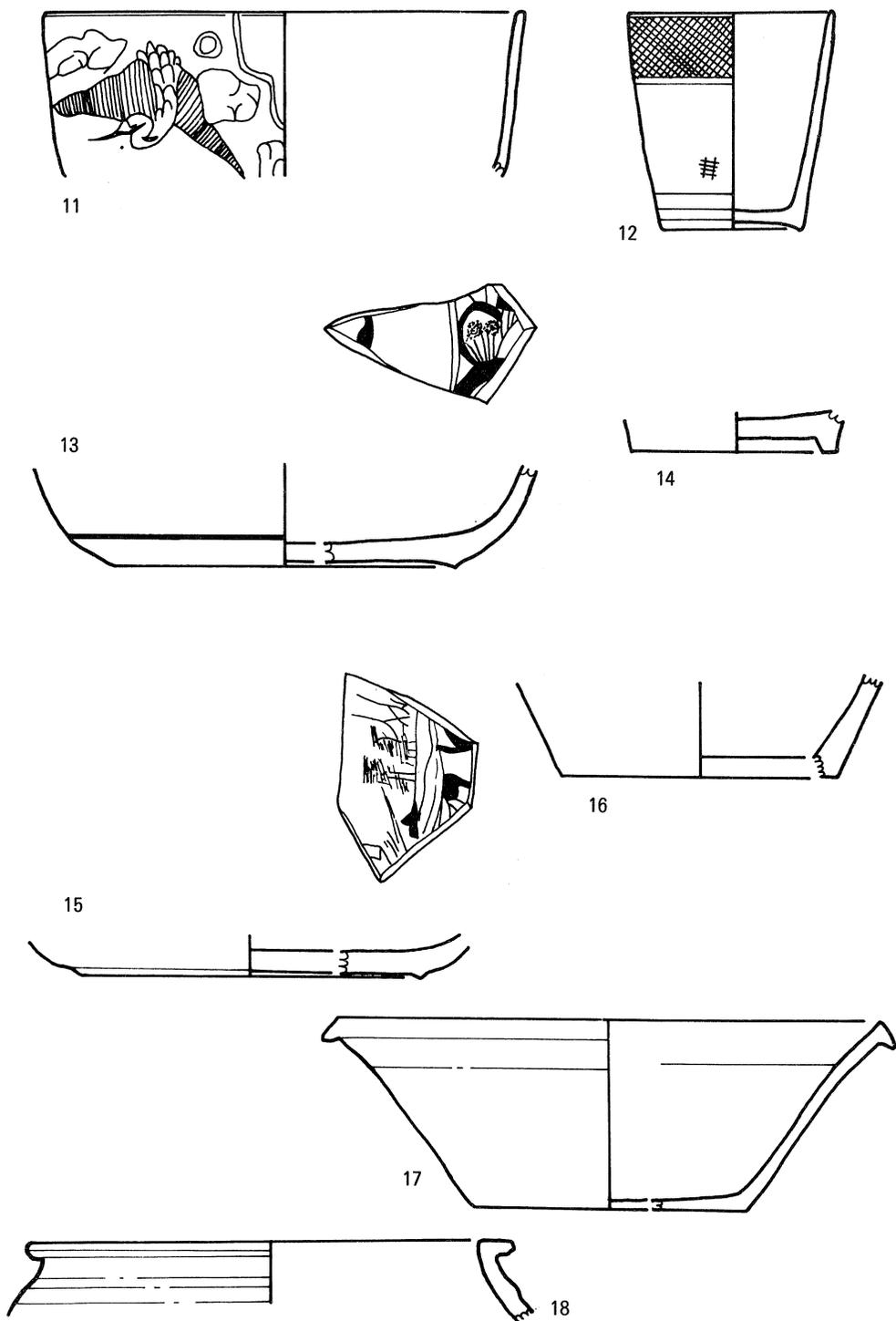
第16図 第3号住居址出土遺物 縮尺1/2



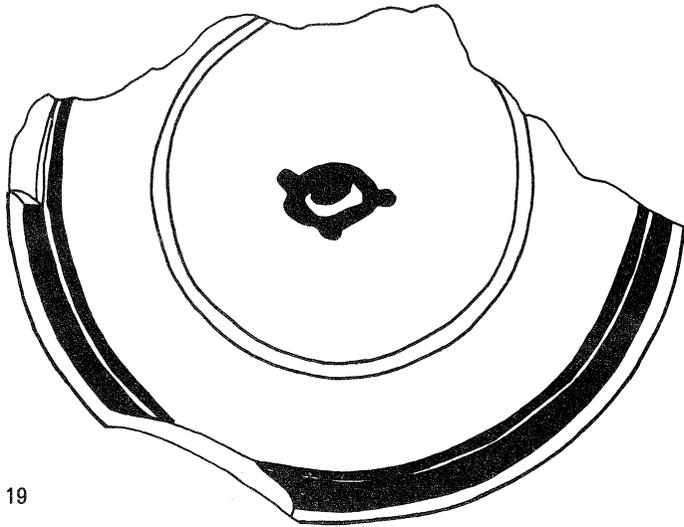
第17图 第3号住居址出土遺物 縮尺1/4



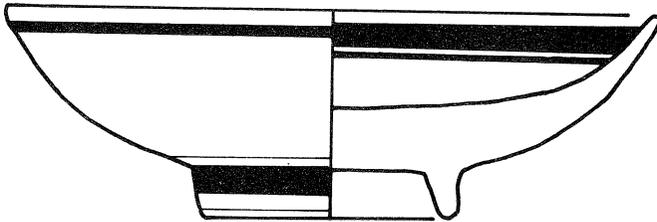
第18図 近世建物址出土遺物 縮尺 1 / 2



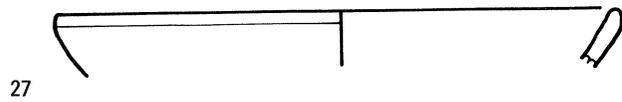
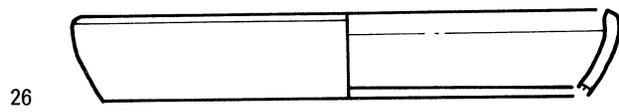
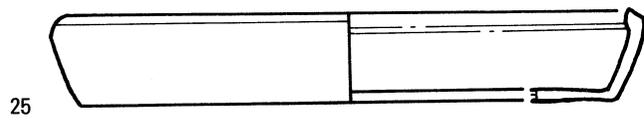
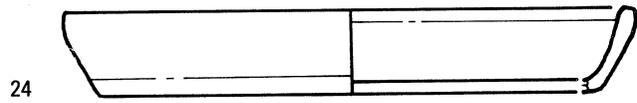
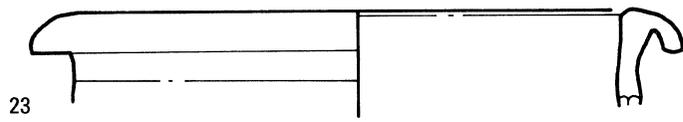
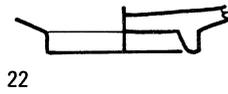
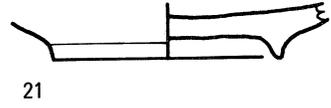
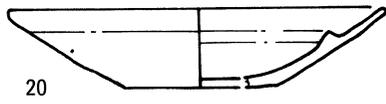
第19図 近世建物址出土遺物 縮尺 1 / 2



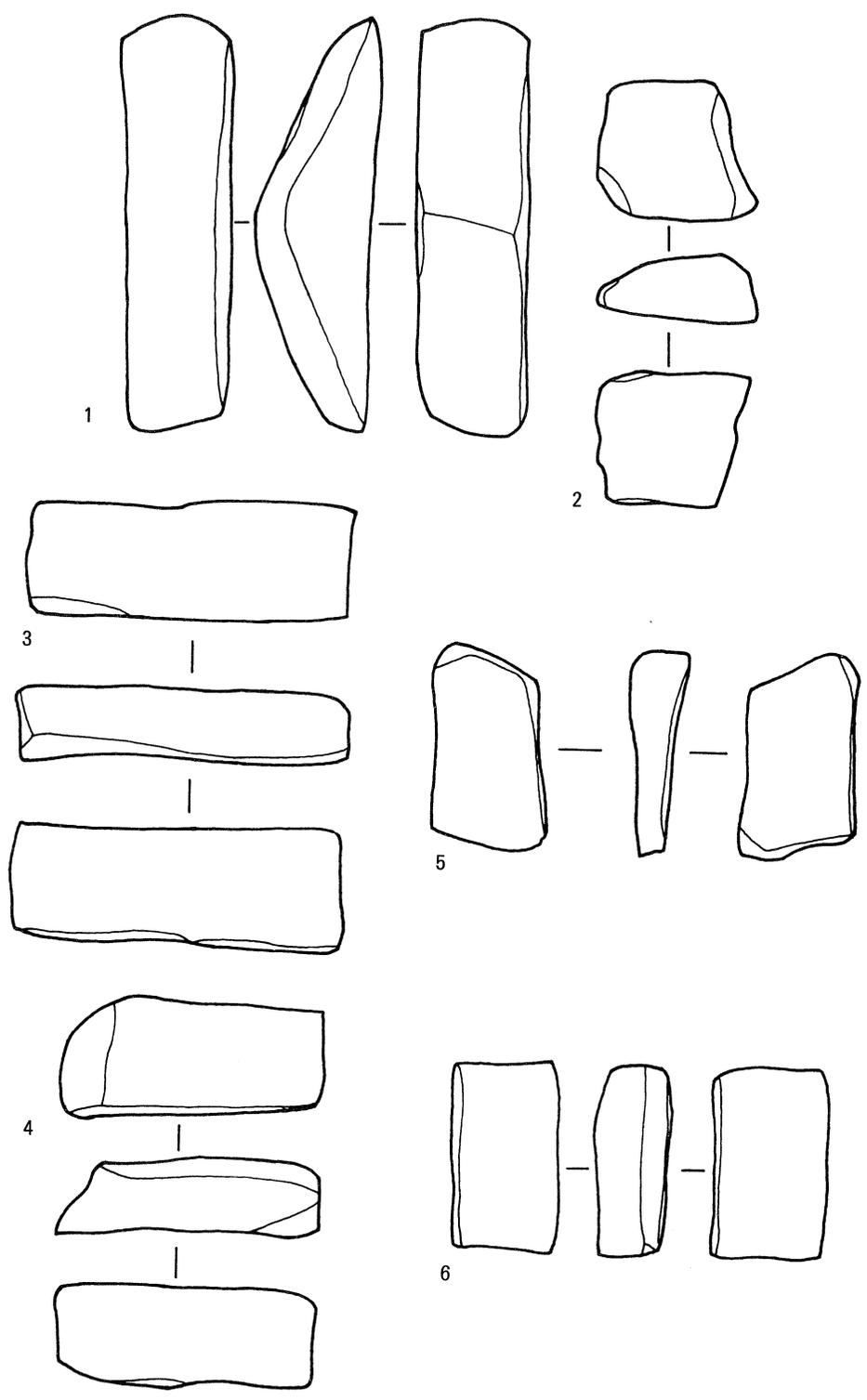
19



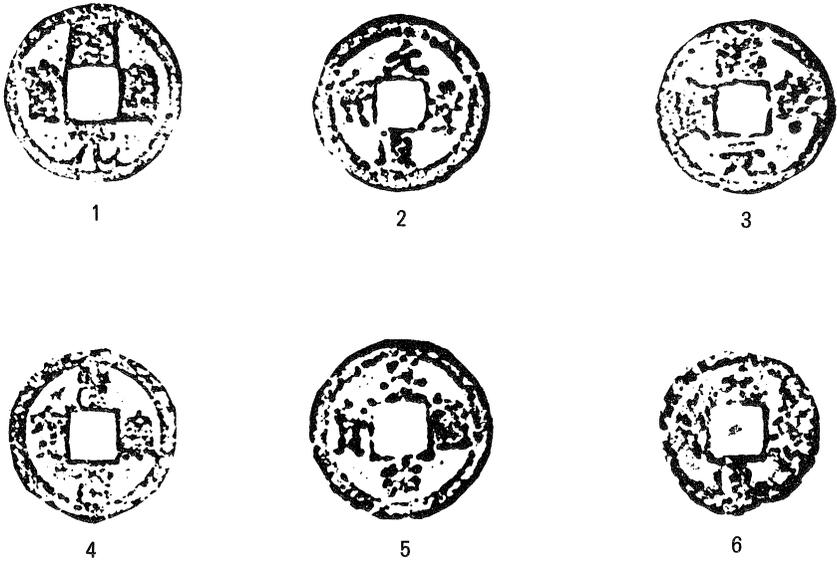
第20図 近世建物址出土遺物 縮尺1/1



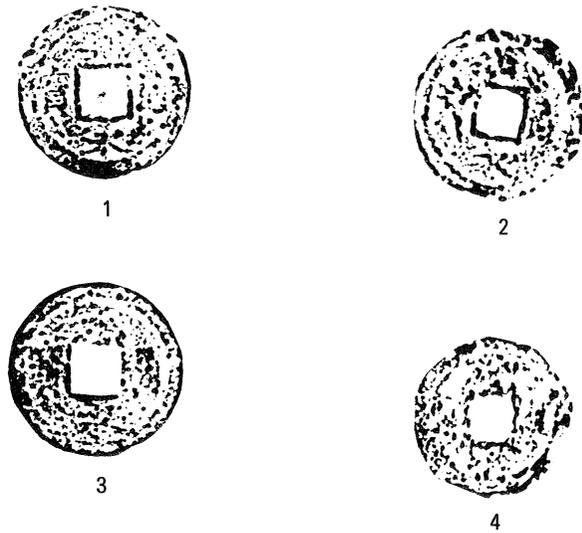
第21図 近世建物址出土遺物 縮尺 1 / 2



第22図 近世建物址出土遺物 縮尺 1 / 2



第23圖 遺構外出土錢貨



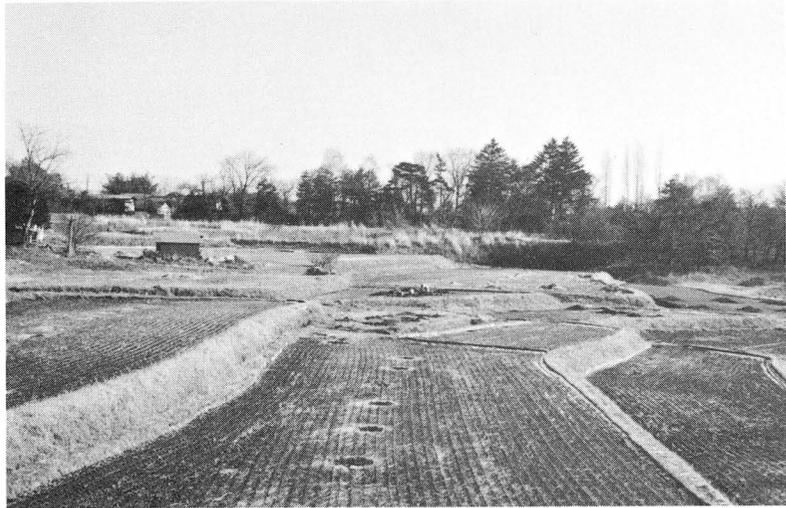
第23圖 近世墓址出土錢貨

圖

版

図版 1

遺跡近影



遺跡近影



図版 2

発掘調査風景

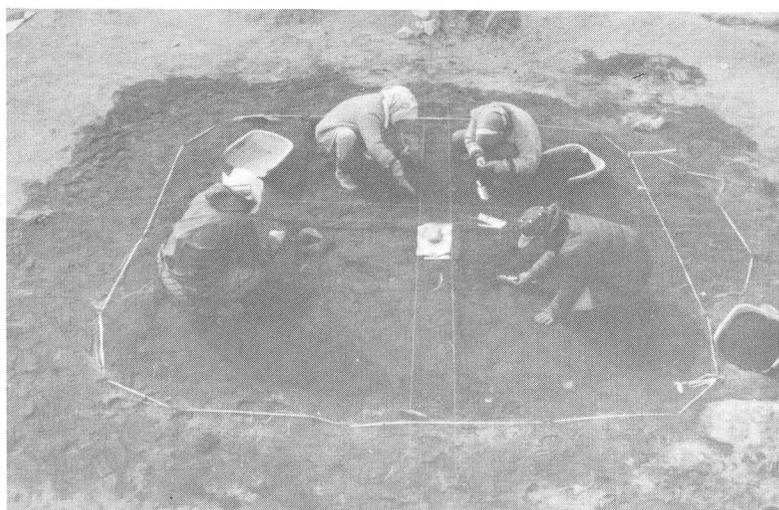


発掘調査風景



图版 3

第 1 号住居址



図版 4

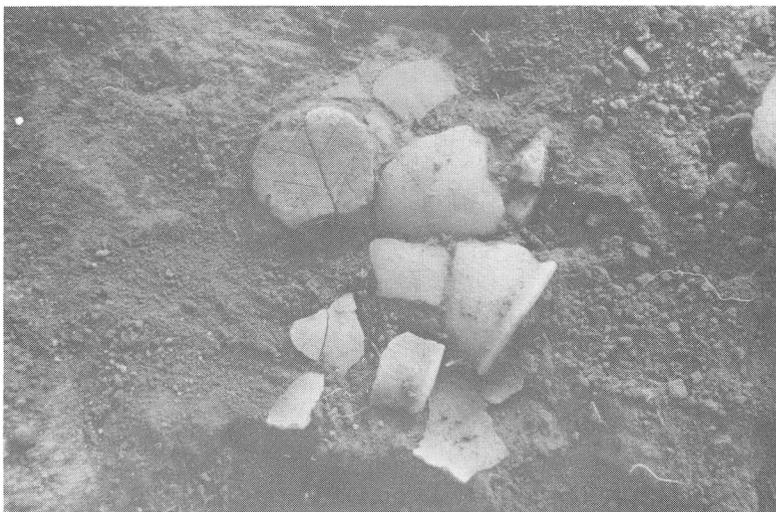
第 1 号住居址



第 1 号住居址
カマド

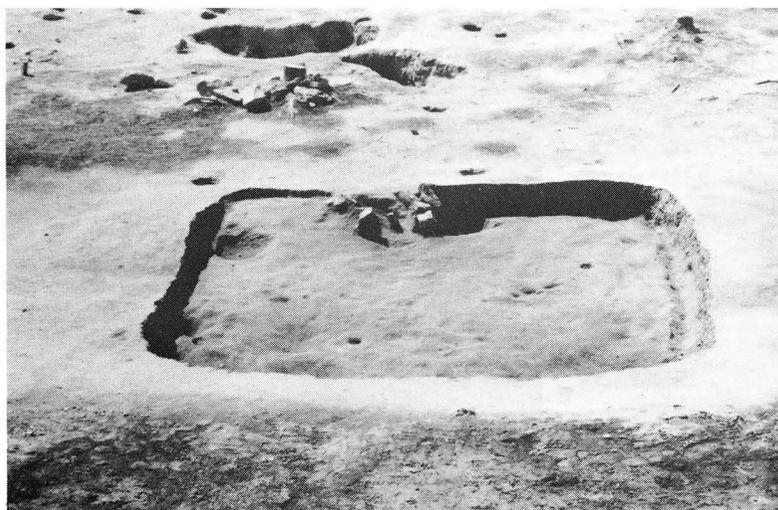
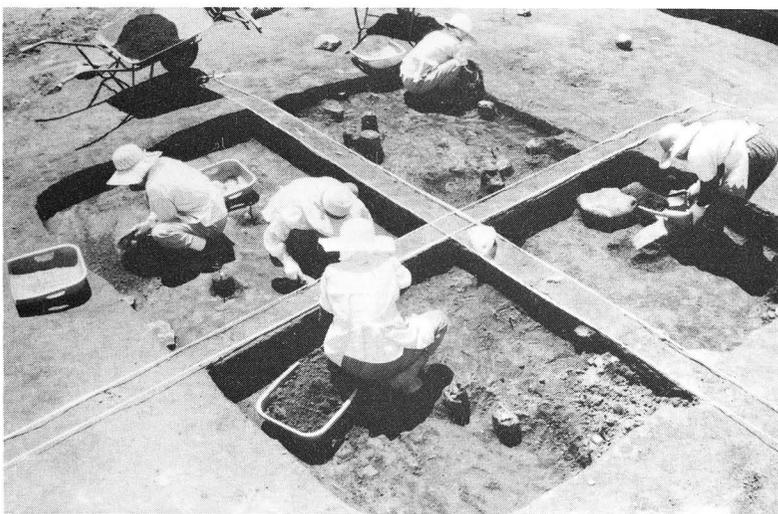


遺物出土状態



图版 5

第 2 号住居址



図版 6

第2号住居址
カマド

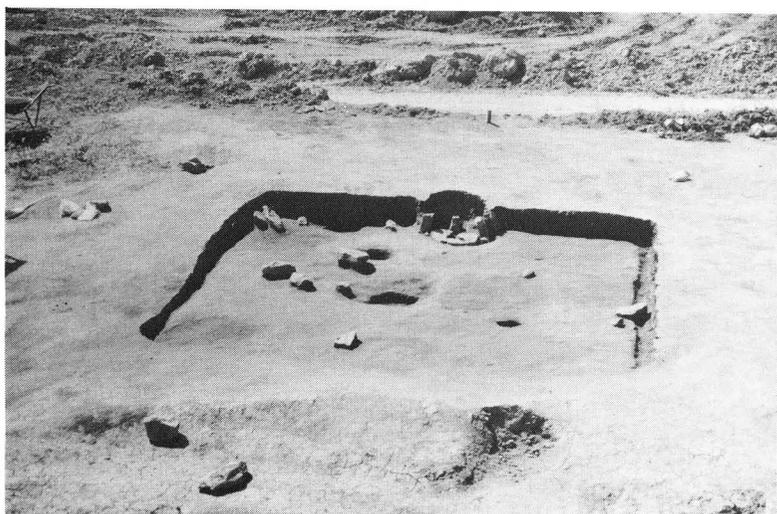


掘り上げ状態



图版 7

第 3 号住居址



図版 8

第3号住居址
カマド

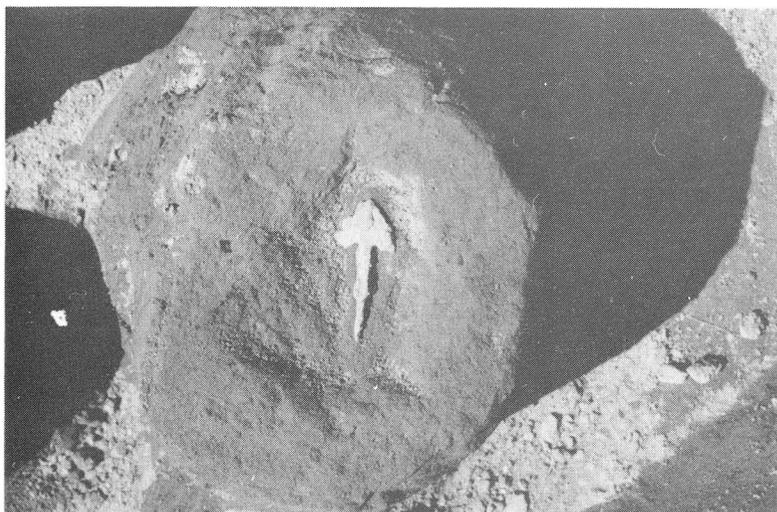


第3号住居址
遺物出土状態



図版 9

第3号住居址
鉄鏃出土状態



第3号住居址
刀子出土状態



图版10

第1号掘立柱建物址



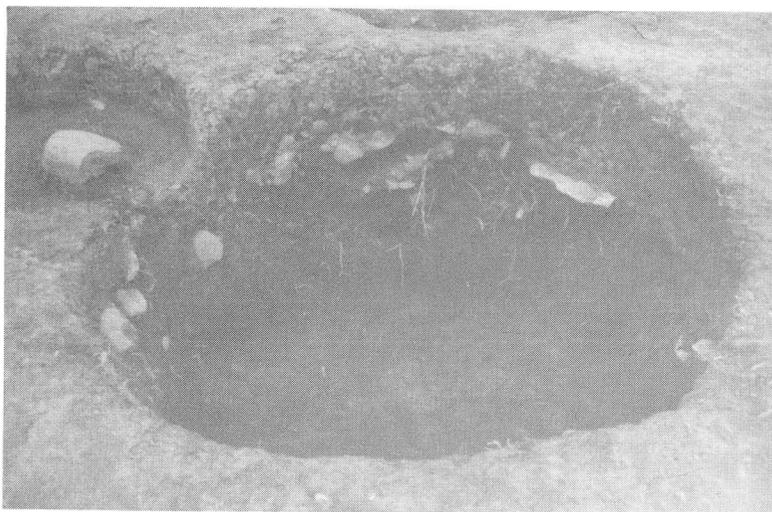
第2号掘立柱建物址



图版11

土 壙

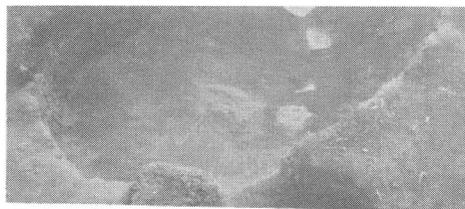
第1号土壙



第2号土壙



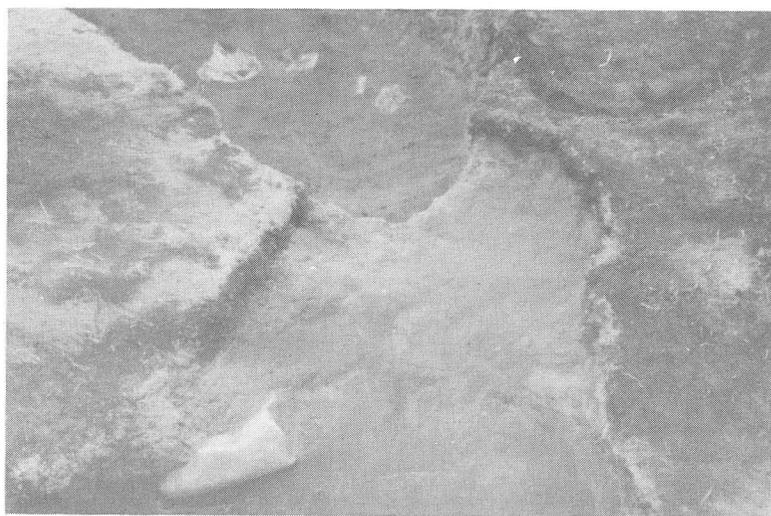
第3号土壙



第4号土壤



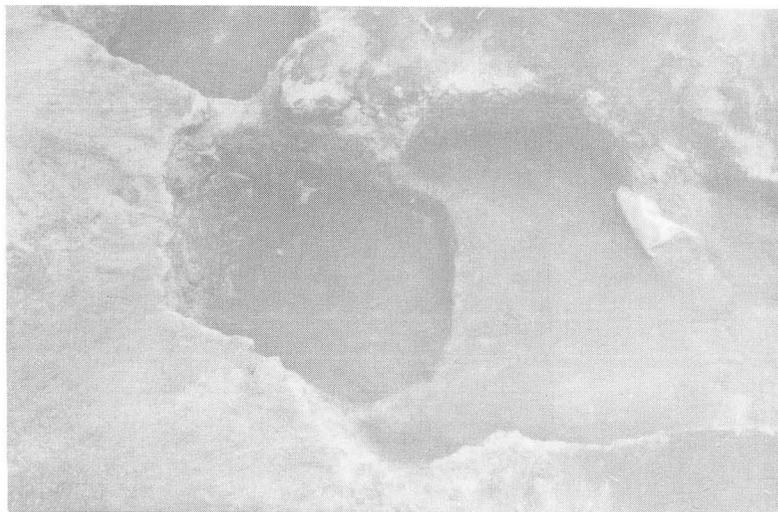
第5号土壤



图版13

第6号土坑

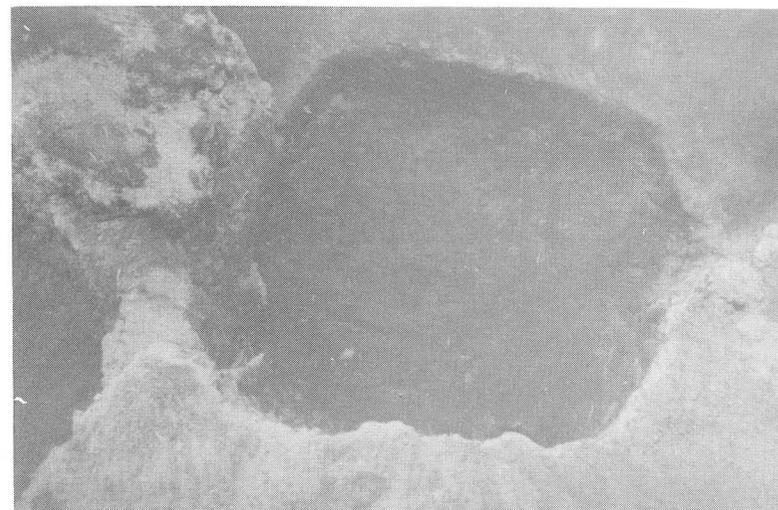
第7号土坑



第8号土坑



第9号土坑



近世建物址



近世墓址



近世墓址寛永通宝
クルミ出土状態

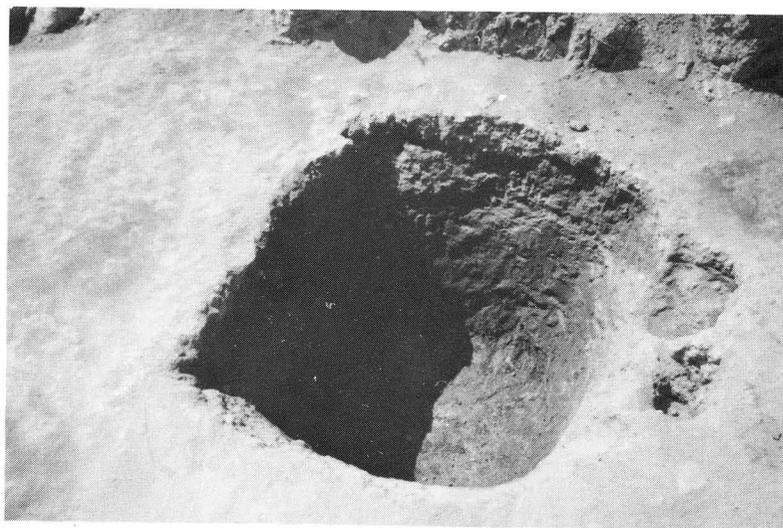


図版16

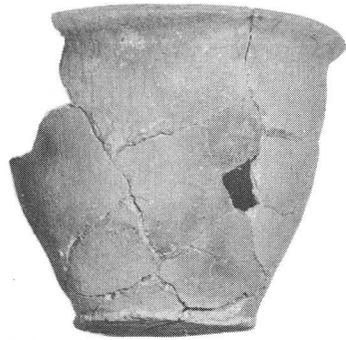
井戸址



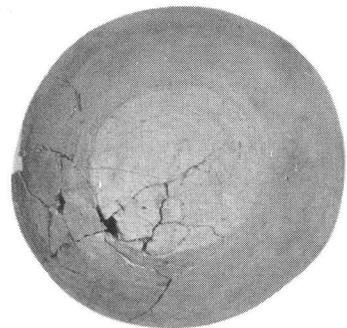
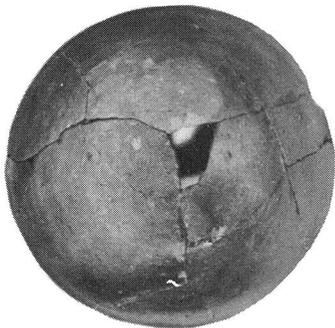
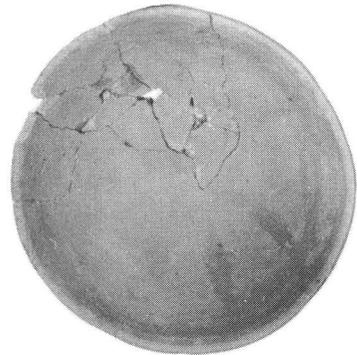
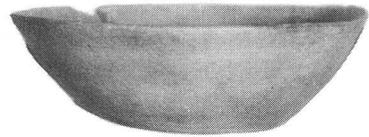
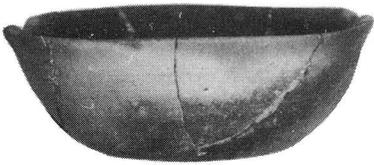
掘り上げ状態



图版17



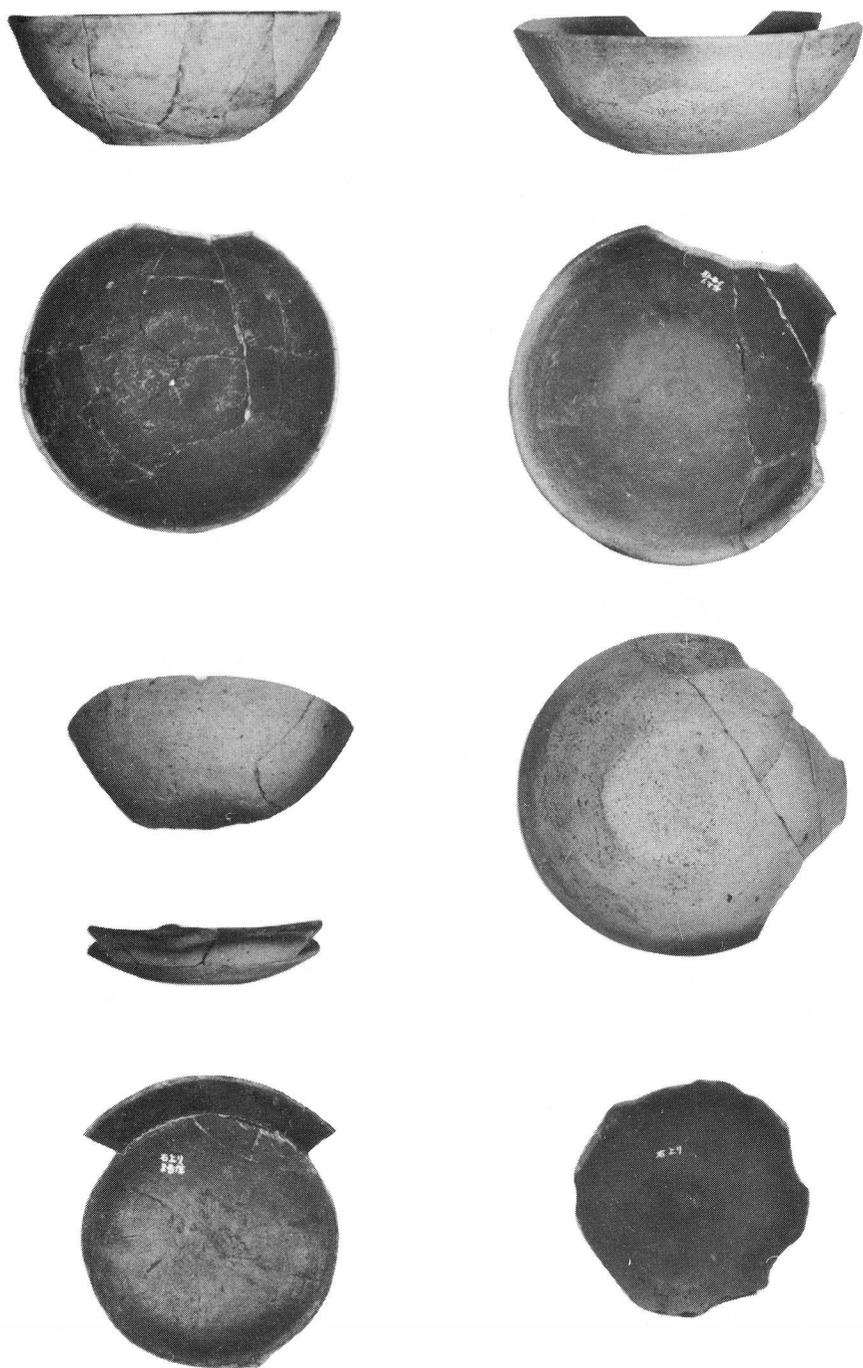
第1号住居址出土遺物

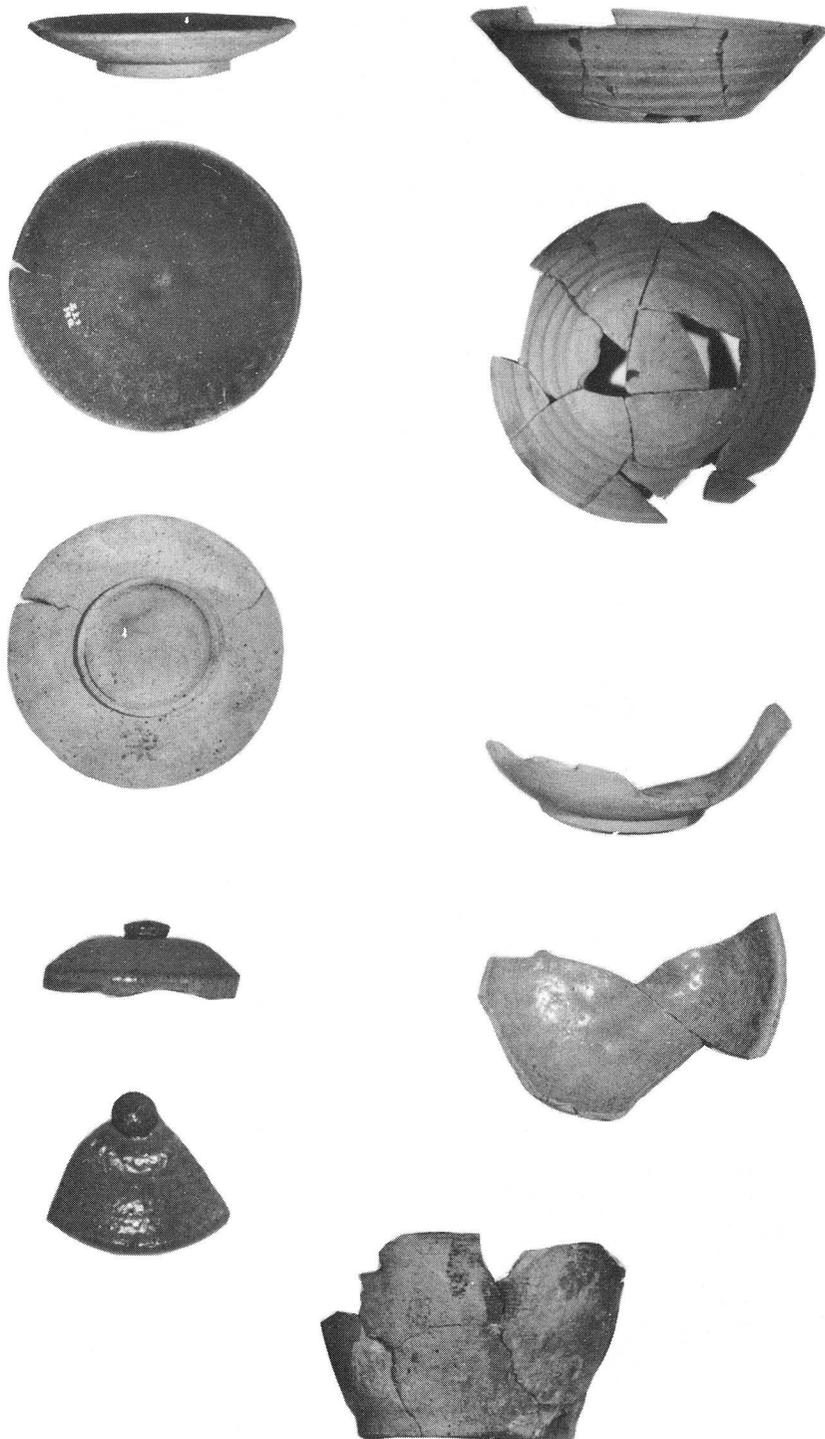


第2号住居址出土遺物



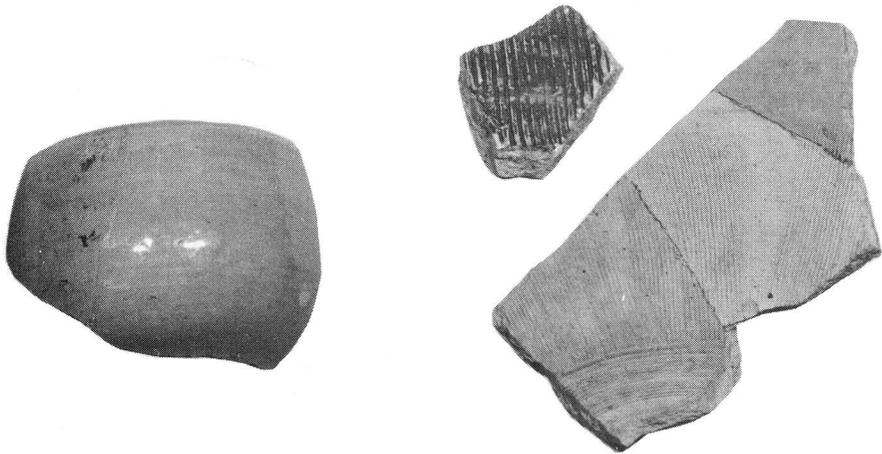
第2号住居址出土遺物



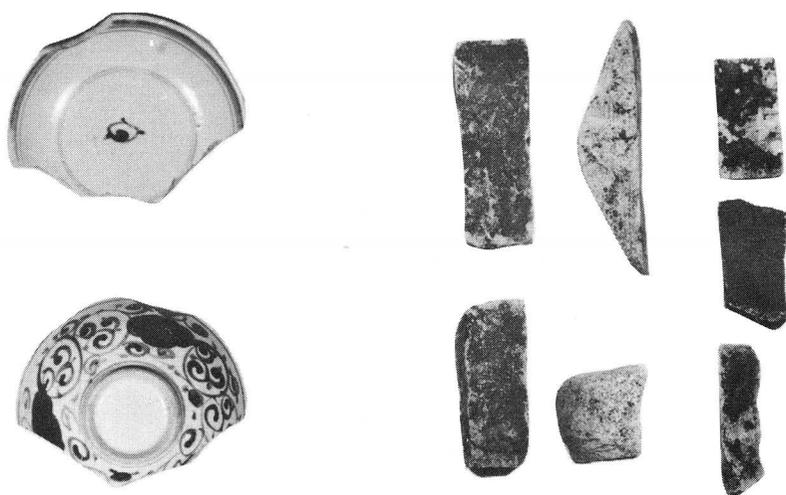


第3号住居址出土遺物

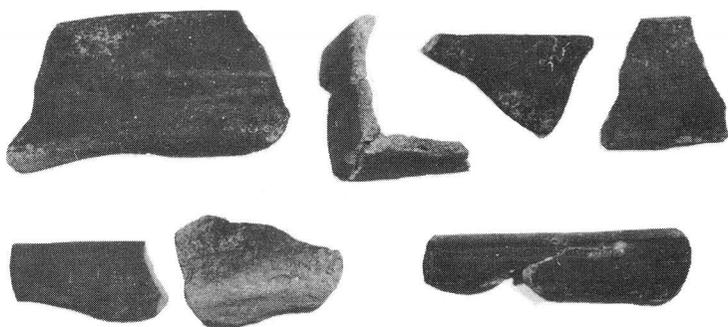
第3号住居
址出土遺物



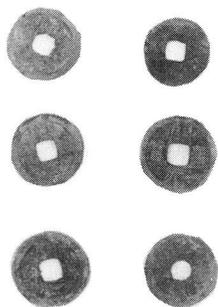
近世建物址出土遺物



近世建物址出土遺物



近世建物址出土遺物



遺構外出土遺物

小淵沢町埋蔵文化財調査報告 第5集

石 上 り 遺 跡

発行日 昭和62年 3 月31日

発 行 小淵沢町教育委員会

印 刷 峡北印刷株式会社
